目　次

学長挨拶 1
ボランティアセンター長挨拶 2

特　集

Volunteer Center Collaboration Space の開設と、
従来スペースの Volunteer Center Lounge への改称 5

Ⅰ．2019年度活動報告

2019年度ボランティアセンター行事一覧 9

1　明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム 10

2　1 Day for Others（1日社会貢献プログラム） 14

3　ボランティアファンド学生チャレンジ賞（育成・支援プログラム） 18
　3.1　ボランティアファンド学生チャレンジ賞2018活動報告 18
　3.2　ボランティアファンド学生チャレンジ賞2019採択団体一覧 27

4　いつでもボランティアチャレンジ（育成・支援プログラム） 28

5　国際機関実務体験プログラム（育成・支援プログラム） 33

6　Gakuvo Style Fund（育成・支援プログラム） 35

7　学生事務局 36

8　「Do for Smile@東日本」プロジェクト（東日本大震災復興支援） 37
　8.1　明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム 37
　8.2　陸前高田復興支援プログラム 40

9　明学レッドクロス（日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップ） 42

10　地域活動（キャンパス周辺地域での活動） 44
10.1　横浜地域活動 44
10.2　白金地域活動 46

11　海外プログラム事業部（国際協力、国際支援） 51

12　MG パール（環境） 55

Ⅱ．新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題
－「2019 年度　新入生ボランティア活動アンケート」を中心に－
..... 59

Ⅲ．ボランティアセンター資料

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま 67
2019 年度　各委員一覧 68
明治学院大学ボランティアセンター規程 69

学長挨拶

振り返りと継続

先日、久しぶりに卒業後30年近くたったゼミ生が訪ねてきてくれました。そのうちの一人は、学生時代から地域の障害児にかかわるボランティア活動を行っていた方ですが、卒業後もその活動を続けていることを、卒業後何年か経ってお目にかかったときに聞いておりましたので、今でも続けているのかを尋ねたところ、いろいろな経緯のなかで、自分で「やりきったのかな」と思えたので、今はその活動は行っていないとのことでした。継続していくことも大切ですが、それをまとめ「けじめ」をつけて、次のステップに進むことも大切なことです。継続が「マンネリ」になることが無いように留意する必要があります。私も大学院生から教員になって初期の時期に児童福祉分野の第一線機関である児童相談所という公的機関に、自分自身の学びのために長く通わせていただきました。ある時、通っていた児童相談所の係長から、「院生ではなく、教員という立場になっても昔と同じように通ってきているのは極めて不自然だ。次年度はスーパーバイザーとして予算もとるから、それで修了しなさい」とのアドバイスをいただきました。自分の学びが深まるという自己都合だけで周りをみていなかったなと大きく反省をしたものです。子ども会活動に参加していた学部学生時代には、子どもから「どうせ卒業するまでだろ、その先は顔も出さない」といわれ、悩んだこともあります。今にして思えば、自分なりに活動をまとめること、日々の活動で子どもにフィードバックすること、後輩に活動をきちんと委ねていくことで、子どもの気持ちの一部には答えられたのかなと思っています。

ボランティア活動は、個人としての継続性とともに組織としての継続性も問われるところだと思います。継続は大切なことですが、過去の活動を漫然と繰り返すだけでは当事者のニーズに合致しなくなる懸念が存在します。活動を振り返り、継続していくものと、時期的に「けじめ」をつけて、活動を停止し、次の活動を模索することも必要です。本報告書の作成は振り返りと検討という役割も担っていると思います。

私が専門とする児童福祉分野での民間活動を調べてみると、ともに活動する仲間が増えていく活動に継続性を認めることができます。仲間が増えないと、創始者の想いがどのように強いものであっても、その個人の転居や高齢化で活動は停滞ないし、休止状況になることが多いようです。志を同じくする仲間、後輩世代の参加のみならず、地域の関係諸団体・機関との連携ができることが鍵となっているようです。この連携が実現できれば、活動の見直しも容易で、活動のシフトも可能になります。それまでの活動を振り返り、積極的に次の活動課題を見出すなかで活動形態を変化させていくことは、「力尽きて」、「意欲が低下して」活動をやめてしまうことと大きな相違があります。ボランティア活動の範囲は拡大し、活動内容も大きく変容してきていると思います。しかし、振り返りを踏まえた継続の重要性は各領域に共通して指摘できると思います。

2016年度にスタートした「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」では、活動の振り返りをその内容に組み込んでいます。次のステップを目指す、あるいは継続するための振り返りは、このプログラムの大切な要素となっています。

本学はこれからもボランティアセンターの活動を通じてボランティア活動の契機を提供し、継続と振り返り、仲間づくりをサポートしてまいります。

皆様の一層のご理解とご協力、ご支援をお願いいたします。

2020年3月
学長　松原康雄

ボランティアセンター長挨拶

出会い・向き合い・考える -センターの今とこれから-

本学は“Do for Others”を教育理念とした大学である。これは社会生活の多様な場面で他者への貢献を考え続けることのできる人材育成を意味している。1998年に創設されたボランティアセンターは、この教育理念の具現化を責務とし、大学内外のあらゆる関係者一人ひとりが社会課題と**出会い**、**向き合い**、共に「他者への貢献を**考える**」ことを通して自分と社会を変えていくことを目指している。

私たちはこの三年、支援対象をセンターで活動する学生から明治学院大学に関わる全ての学生・教職員へと広げ、センターの機能を上記の「出会い・向き合い・考える」の3段階の活動支援へと整理し、変革を進めてきた。具体的には、「1 Day for Others」を、「社会課題に**出会う**場」と位置づけ、一つひとつのプログラムの質の向上をはかると共に、教職員・学外協力者によるプログラムの創生を行なった。また、いつでもだれでも思いついたその時にボランティア活動を始められる「いつでもボランティア（いつボラ）」制度を創設し、従来の「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（ボラチャレ）」とかみ合わせ「社会課題に**出会い／向き合う**場」と位置付け、教職員、同窓生、地域の皆様との協働を展開し、学生たちが自律的に自由に成長できる土壌を構築することを目指した。その一つの形が横浜キャンパスに新たに誕生した「Volunteer Center Collaboration Space（コラボ）」である。ここでは学生が自由に活動する中で、互いに出会うことにより活動が活性化し、複合的に展開し始めている。さらにこれらの変革に伴い、2012年度より行なってきたセクション活動を発展的に解消することを決定し、学生たちとこれまでの活動を振り返り、話し合いを重ね、その後の展開を支援してきた。

本報告書には、この一年の学生たちの学びとセクション活動からの巣立ちに向けての決意、喪失感と期待に加え、すでに動き始めている新たな展開の形が示されている。東日本大震災直後から継続して活動してきた学生たちは、改めてこれまで培ったつながりの大切さ、自らの「何かしたい」想いに出会い、再び関わりの意味を考え始めている。新たに「対話」をその軸として飛躍的な発展を遂げた海外プログラム事業部の取り組みは大学ボランティアとして一つのあり方を示していると言えよう。まさに**考え**続けた1年間であった。学長の言葉にあるような「活動を振り返り継続の意味を考える」力強い学生たちの姿がここにある。ぜひご堪能いただき、忌憚のないご意見をいただきたければと思う。

しかしまた課題も山積している。新入生アンケートに示されているボランティアへの強い関心を**出会う**場にどのようにつなげ育むか、アンケート分析にある提言を実現して行くのは、次年度以降の大切な課題である。「いつボラ」「ボラチャレ」などの**向き合い考える場**の取り組みも発展途上である。学内外の資源とのさらなる連携が鍵となるだろう。本年完成年度を迎えたことを機に学生たちの実態を反映し、ほぼ全ての正課科目をボランティア活動と自由に関連づけて他者への貢献の意味を考えられるよう変更した「サティフィケイト・プログラム」の展開にも期待したい。

新型コロナウイルスによる社会課題は拡大しつつある。対面活動の難しさから、2020年度春の「1 Day for Others」は、震災以来の中止をすでに決めている。この問題は、さまざまな社会課題とともに人とのつながりの意味と大切さを今一度私たちに問いかけている。そして学生たちもまた、この状況に対して何ができるのか考え、さまざまな工夫を始めている。来年度以降のさらなる発展を期待したい。

最後に私事ではあるが、足掛け5年間ボランティアセンター業務に就き多くの貴重な出会いと学びをいただいた。この間、関わらせていただいたすべての方に深いこころからの感謝を申し上げたい。

2020年3月
ボランティアセンター長　杉山恵理子

Volunteer Center Collaboration Space の開設と、従来スペースのVolunteer Center Loungeへの改称（2019年9月20日より、ボランティアセンター横浜）

ボランティアセンター横浜（以下：ボラセン）では、昼休みを中心に利用学生が溢れて入れなくなってしまうのが悩みの種でした。2019年度は春学期が始まるとともに、いままでにも増して混み具合が進んでしまい、あわせてボラセンに集う学生の元気が増えるとともに活動に伴う学生物品も増えていき、人・物ともに溢れかえるボラセンになってしまいました。そんな折に、Y'ins（PC実習室）の利用が数年前より落ち着いているとの報告があり、その一部Y'insB（マッキントッシュPC室）をボラセンのスペースとして運用してもよいとのお話をいただきました。これまでのボラセンは、溢れてしまった学生達には空き教室などで活動してもらっていて、異なる活動の学生達が同じスペースで活動・交流していれば本来生まれたであろう学生間の繋がりに、やむなく目を瞑っていた状況がありました。そのため新しいスペースには、複数の団体が同時に活動できて、話し合いもしやすく、作業・発表もできる開かれた空間作りをコンセプトに掲げ、名称を“Volunteer Center Collaboration Space”（以下：コラボ）としています。

コラボ開設から半年間の利用を振りかえってみても、報告会やイベント（中には古着によるファッションショーの準備も）、少人数授業での利用など、いままでのスペースでは起き得なかった活用方法が生まれており、大学外の方からも面白そうなスペースですね、とお褒めの言葉をいただくこともありました。

そして事務室に隣接のいままでの学生スペースも、あらためて“Volunteer Center Lounge”呼び名を改称しました。学生や活動備品、スタッフが押し詰まっていたかつてのスペースは、今後授業期間には学生コーディネーターを配置することにしています。飛び込み学生の相談などを担ってもらい、ボラセンが永らく課題としている、個人学生が入りやすく、利用しやすい空間づくりの一翼を担ってもらいます。あわせて外部ボランティア情報や、活動助成金情報、ボランティアセンターのプログラム情報など、学生のボランティア活動に有益な情報の発信場所になれるような環境づくりに努めます。

最後に、ボラセンはいままで学生に焦点をあてた対応に偏りがちだったところがありました。今後は、増えつつある教職員ボランティアのきっかけとなるスペースにもなっていくという課題も踏まえた場にしていきたいと思います。

新設の“Volunteer Center Collaboration Space”、改称した“Volunteer Center Lounge”。ボランティアセンター横浜は、2019年度秋学期より2つの場所で展開することになりました。これらの場所から多くの学生や教職員の活動が外に飛び立てるよう支援していきたいと思います。

（職員　高橋千尋）

Volunteer Center Collaboration Space 開設までの変遷を画像で辿る

2019年度春学期のボランティアセンター横浜の様子

昼休みに、学生スペースに学生が入り切れなくなることが頻発した。

学生スペースの通路にも活動物品が溢れていた。

ボラセンに入れなかった学生には、空き教室を探して活動してもらっていた。

2019年度秋学期Volunteer Center Collaboration Space 開設当初の様子

コラボも、開設当初より満員になることがあった。

学生は、スペースを想定外の使い方もする。
（写真はファッションショーの準備）

木曜5限、猪瀬先生による授業でのご利用。
最終的にはコラボが通常教室になった。

2019年度末、リニューアルをしたVolunteer Center Lounge

2020年度に向けて、サインも新しくなった。

奥が学生コーディネーターの勤務スペースとなる。

情報コーナー充実とともに、スタッフ達の持出しで珈琲コーナー設置もあった。

2019年度ボランティアセンター行事一覧

4月	新入生対象学科別ガイダンス 新入生対象ボランティア活動アンケート実施 ボランティアセンターオリエンテーション 1 Day for Others説明会 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム ガイダンス 岩手県盛岡市立厨川中学校修学旅行生来室（白金） 1 Day for Others春開催（～8月・52プログラム） 赤十字献血活動
5月	国際機関実務体験プログラム説明会（夏期） 第5回Gakuvo Style Fund活動報告会 Gakuvo Style Fund2019募集 2019年度第1回ボランティアセンター運営委員会 明治学院大学大学祭「戸塚まつり」 岐阜県関市立旭ヶ丘中学校修学旅行生来室（白金）
6月	国際機関実務体験プログラムオリエンテーション（夏期） インテグレーション講座（登録1年生対象）
7月	インテグレーション講座（登録1年生対象） 夏のボランティアフェア 2019年度（横浜）近隣自治会等役員との懇談会に出席
8～9月	オープンキャンパスへの参加（ボランティアミュージアム） インテグレーション講座（登録1年生対象） 「Do for Smile@東日本」プロジェクト夏期プログラム実施 国際機関実務体験プログラム実施（夏期） 「令和元年8月豪雨、令和元年台風15号千葉県災害」に伴う募金活動を実施 1 Day for Others秋開催（9～2月・30プログラム）
10月	国際機関実務体験プログラム説明会開催（春期） ボランティアファンド学生チャレンジ賞2018活動報告会 「台風19号災害」に伴う募金活動を実施
11月	明治学院大学大学祭「白金祭」 2019年度第2回ボランティアセンター運営委員会 赤十字献血活動 ボランティアファンド学生チャレンジ賞2019募集 第4回「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」 インテグレーション講座（登録1～3年生対象） 国際機関実務体験プログラムオリエンテーション（春期）
12月	Gakuvo Style Fund2019活動シェア会開催 明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」クリスマス会に出席 第4回「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」表彰式
1～3月	1 Day for Others 2019サポート学生説明会（随時） 国際機関実務体験プログラム実施（春期） 2019年度第3回ボランティアセンター運営委員会

1　明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム

1.1　総括

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」は、本学で活発に行われているボランティア実践と、大学の学びを融合する全学的な取り組みとして2016年度に始まった。

このプログラムは、①135時間以上のボランティア実践、②各学部学科と、共通科目を担当する教養教育センターが指定した科目のうち16単位の修得、③135時間のボランティア実践と、大学での学びを結びつけるための手がかりをつくる「インテグレーション講座（4回）」を受講した学生に、サティフィケイト（修了証）を授与するものである。

昨年度末には2016年度に登録した12名の学生（3年生）が認証を受けた。初めての認証式は記念館において学長より学生一人一人に修了証が手渡された。それに続いて今年度末には、2017年に登録した9名の学生（3年生）と2016年に登録した2名の学生（4年生）合計11名が認証を受けることとなった。

認証に向けて、最終報告書は2020年1月10日が提出〆切であった。最終報告書が出揃ってから、2月14日の学部運営委員による提出までの約1ヶ月間に、それぞれの学部運営委員により学部の学生に対して熱心な指導がなされた。メールでのやりとり、研究室に出向いてのやりとり、あるいはボランティアセンターの学生スペースで学部運営委員と学生が待ち合わせて指導を受けるといった形など様々な方法で学部の専門性を深める指導がなされた。こういった全学的な体制できめ細やかな指導がなされていることに心より感謝したい。

登録2年目となる2018年度生は、11月の第3回インテグレーション講座で2017年度登録学生（3年生）の報告を聞き、次年度は自身が学びと実践を結び付けて報告することに対して見通しをもった。第3回インテグレーション講座のレポートを提出し、2年目を終えた登録生は17名である。

登録1年目の2019年度登録学生は春学期の第1回インテグレーション講座を受講して登録した人数は57名であった。11月の第2回インテグレーション講座で教養教育センターの運営委員によるボランティア学のレクチャーを受けレポートを提出し、1年目を終えた登録生は33名である。

学年を追うごとに登録学生が減少する傾向は、前年度、前々年度もほぼ同じような傾向であった。今後は登録した学生が最終報告まで続けて取り組めるような支援にさらに力を入れていく必要があるといえる。しかしながら、意欲の高い登録生に徐々に絞られて最終報告を迎えることにより、少数ながらそれぞれ意欲にあふれた実践と学びの結びつけの報告がなされていることにつながっているともいえる。

プログラムを開始して5年目を迎える2020年度は、各学部とのさらなる連携を図り全学プログラムとしての位置づけを確かなものにしていけるように検証と改善を引き続き行っていく。

（ボランティアコーディネーター　田口めぐみ）

1.2　2019年度スケジュール

日にち	内容
4月	新入生向け学科別ガイダンスにて「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」について告知
①　4月22日（月） ②　4月24日（水）	ガイダンスの実施 ボランティアと教育の連携についての意義、プログラムの概要を説明
5月	ショート講座 「“いつボラ”を活用してみよう」対象：全学生（横浜：5/14、5/28） 「11月の発表に向けて見通しをもとう」対象：登録3年生（横浜：5/10、5/22、白金：5/15、5/27）
5月13日（月）	インテグレーション講座の告知・エントリー受付開始
6月	ショート講座 「パネルシアター作ってみよう」対象：全学生（横浜：6/18、6/27） 「11月の発表の内容を考えてみよう」対象：3年生（横浜：6/12、6/20、白金：6/10、6/19）
7月	ショート講座 「パネルシアター作りを体験してみよう」対象：全学生（横浜：7/9, 7/10）

①　6月25日（火） ②　6月26日（水） ③　7月6日（土） ④　8月2日（金）	インテグレーション講座　対象：登録1年生（2年生も可） 【テーマ】「ボランティア実践から学ぶとは」 【内　容】「大学での学び」と「ボランティア実践からの学び」の違いについて理解を深めた。 【講　師】猪瀬浩平（ボランティアセンター長補佐　教養教育センター教授） 菅沼彰宏（ボランティアコーディネーター） 田口めぐみ（ボランティアコーディネーター）
10月 11月	ショート講座 「パワーポイントのリハーサルをしよう」対象：登録3年生（横浜：希望日、白金：希望日）
11月9日（土）	インテグレーション講座　対象：全登録生 【テーマ】 登録1年生「ボランティア実践に基づく大学での学びについて知る」 登録2年生「自分のボランティア実践を大学での学びに結びつける」 登録3年生「ボランティア実践と大学での学びを融合した“私のDo for Others”」 【内　容】 午前の部：「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」の発表を全登録生が聴講。 午後の部：登録1年生は1年生向けのボランティア学のレクチャーを受講しワークシートを提出。 登録2年生、登録3年生は学部に分かれ、3年生は自らの「ボランティア実践と大学での学び」の成果をプレゼンテーションした。2年生は聴講のうえ、レポートを提出。後半は2年生がそれぞれの学びと実践の現状を報告し、3年生が自身の経験に基づきアドバイスした。 【講　師】 午前の部：ボランティアセンター運営委員 午後の部1年生向け：教養教育センターのボランティアセンター運営委員 午後の部2年生3年生向け：各学部のボランティアセンター運営委員

1.3　2019年度プログラム登録者数

	学部						合計
	文	経済	社会	法	国際	心理	
2017年度生 （第3回インテグレーション講座（2019.11）を受講した者）	2	1	2	0	2	3	10
2018年度生 （第3回インテグレーション講座（2019.11）を受講した者）	2	2	3	0	2	5	14
2019年度生 （第1回インテグレーション講座（2019.6-8）を受講した者）	8	4	20	10	10	6	58
合計	12	7	25	10	14	14	82

1.4 取り組みのようす

昨年度末に初めてのサティフィケイトの授与式を行い、どの学年の登録学生にとっても先輩の足跡を知ることのできる状態が整った。ボランティアセンターとしても新入生のガイダンスから授与式までの3年間の流れを見通して支援できる状態が整った年度であるといえる。

今年度は一旦完成した三年間の流れを見直しながら改善を図ることも大切に取り組んできた。その一つが学部ごとの指定科目のあり方の見直しである。学部ごとに指定科目に対する考え方の違いがあり、学部の学びの内容とボランティアとの融合に関する捉え方もそれぞれであった。学部やコースによっては指定科目を履修することが困難な状況もあり、登録学生から様々な意見や要望があった。適切に履修できるように科目を増やすなどの細かな改善は逐次行ってきた。

一方で、このプログラムの開始以来の学生の取り組みをみると、必ずしも指定された科目のみをボランティア実践と結びつけているとはいえない事例が多くみられた。このことから、学部が科目を指定するという考え方を大きく見直して、学生自身が科目を指定し、その科目と自身のボランティア実践を結び付けるという方法を今年度1年間かけて各学部に対し理解を図ってきた。

その結果、来年度の登録学生からは学生が自身で結びつける科目を指定し、学生の主体的な実践と学びとの結び付けを促すことを重視した方法へと転換を図ることとなった。

1.5　学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」の関連企画として、全3、4年生をエントリー対象として開催した。自身が取り組んだボランティア実践と、学部・学科の授業における学びを関連付け、双方の深まりを図った事例の発表の場を提供し、優れた発表に対して学長賞等を授与するものである。

一次審査（書類審査）を通過した学生が、2019年11月9日に発表を行った（一般公開）。この発表を2019年度登録学生が「第2回インテグレーション講座」の先輩学生の発表として、2018年度登録学生が「第3回インテグレーション講座」の先輩の発表として聴講した。2017年度登録生は「第4回インテグレーション講座」の発表者として発表、あるいは仲間の発表として聴講した。

参加者の内訳を見ると、4年生4名（サティフィケイト授与済み1名、サティフィケイトプログラム登録中2名、サティフィケイトプログラムに登録なし1名）3年生5名（サティフィケイトプログラム登録中5名）であった。サティフィケイトプログラムと関連付けての応募が3年生4年生共に多かった。

（ボランティアコーディネーター　田口めぐみ）

プレゼンテーション大会での発表

プレゼン大会　会場からの質疑

学部別分科会（心理学部）

学部別分科会(国際学部)

「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」では、厳正なる選考の結果、下記の学生の入賞が決定した。

【テーマ】“Do for Others”の実現に向けた「大学での学び」と「ボランティア実践」の統合

学長賞　1名

「技能実習生の支援の難しさ～全統一労働組合でのボランティア活動から～」
国際学部国際学科4年　鹿田光沙

ボランティアセンター運営委員長賞　3名

「地域の声に耳を傾け、共に成す」
社会学部社会福祉学科4年　渡邉日向子

「経営学視点の復興支援」
経済学部経営学科3年　多賀佑里奈

「障害のある人に寄り添った支援をするために」
社会学部社会福祉学科3年　志村楓

ボランティアセンター長賞　3名

「吉里吉里から見る法の本質とあり方について」
法学部法律学科4年　寺西なつみ

「おどりが生み出すコミュニティ郡上おどりin戸塚からの考察」
国際学部国際学科4年　秋屋美桜

「「英語教育学の学び」と「「夜の日本語教育」の融合」
文学部英文学科3年　山田茉帆

奨励賞　2名

「子どもから見るフランスと日本の違い」
文学部フランス文学科3年　佐藤和都

「社会学科の学びをボランティアに―対等な関係で知る事実を残し、伝えていく―」
社会学部社会学科3年　山崎夏穂

※学年は当時（学科別50音順）

2　1 Day for Others（1日社会貢献プログラム）

職員総括

2019年度の「1 Day for Others」は、過去最多となる「82」のプログラムを、受入先の皆様のご尽力により学生に提供いただいた。そして、プログラムに参加した延べ662名の学生がプログラムで出会う多くの方々や、団体の活動、活動理念に触れることで多くの学びを得て、その後の学生生活にいかすことができた。はじめにご多忙の中、本学学生のためにプログラムをアレンジいただき、学生を温かく受け入れていただいた皆様方に、この場をお借りして感謝申し上げたい。

2019年度においては、「1 Day for Others」の新たな取り組みとして、学内関連組織や関係者との連携に力を入れて新規プログラムを実施したことが特徴として挙げられる。一例を紹介すると、本学と港区が連携し、港区が本学に業務委託をするかたちで大学内に開設をしている、港区在住の60歳以上の方々を対象としたチャレンジコミュニティ大学(CC大学)がある。その歴史は古く、開校した2007年から13期の修了生を輩出し、約760名が地域コミュニティ活性化のリーダーとして活躍をしている。そのCC大学の修了生で組織されているチャレンジコミュニティクラブ(CCC)と協働させていただき、CCCに所属する方々と関係が深い団体に5つのプログラムを提供していただくことができた。いずれも港区に拠点を置く様々な団体によるもので、港区にキャンパスを持つ本学として、より身近であるコミュニティの中で学生が活動をさせていただくことができたのは非常に有意義であり、1 Day for Othersのコンセプトとも親和性の高いプログラムになったと感じている。その他、本学に所属する教職員より、紹介をいただいた団体とも複数のプログラムを実施できた。引き続き、CCCはじめ多くの団体と連携を深め、協働をしていきたいと考える。

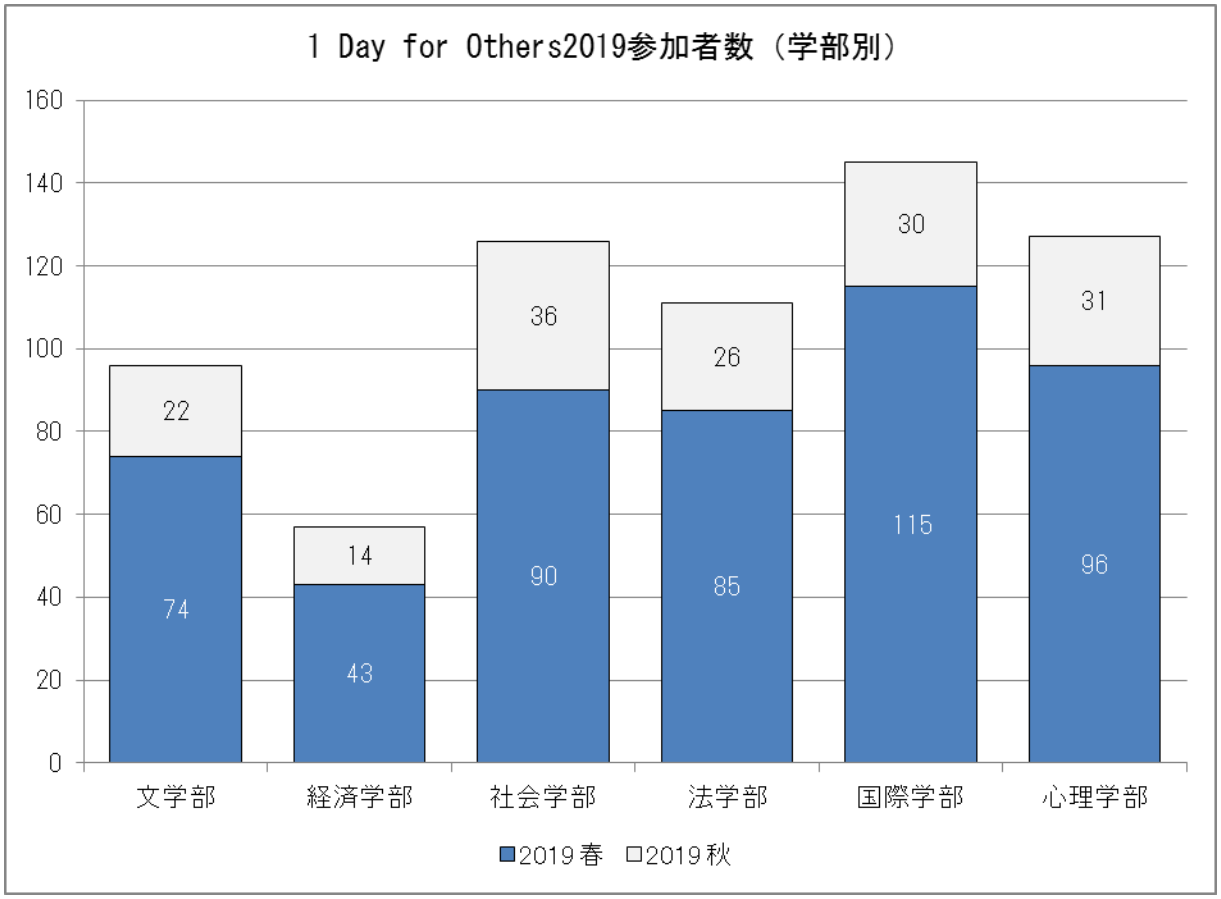
また、例年実施をしているが、2019年度においても、参加学生に対してアンケート調査(アンケートの参加者回答率88.0%)を行った。そのアンケートの中のプログラムの満足度を問う項目で、「大満足」「満足」「普通」「やや不満足」「不満足」の選択肢の中から「大満足」「満足」と回答した参加者は「90%」を超えた。受入先の皆様方が提供くださるプログラムの質の高さや、学生がプログラムに申し込み参加するまでのプロセスのスムーズさが、裏付けられる数字であると考える。今後についても、この高い水準を維持すべく、学生の送り出し時の手続き等もよりスムーズにできるよう、プログラムを担当するサポート学生とボランティアセンターの連携も正確にすることに努めていきたい。

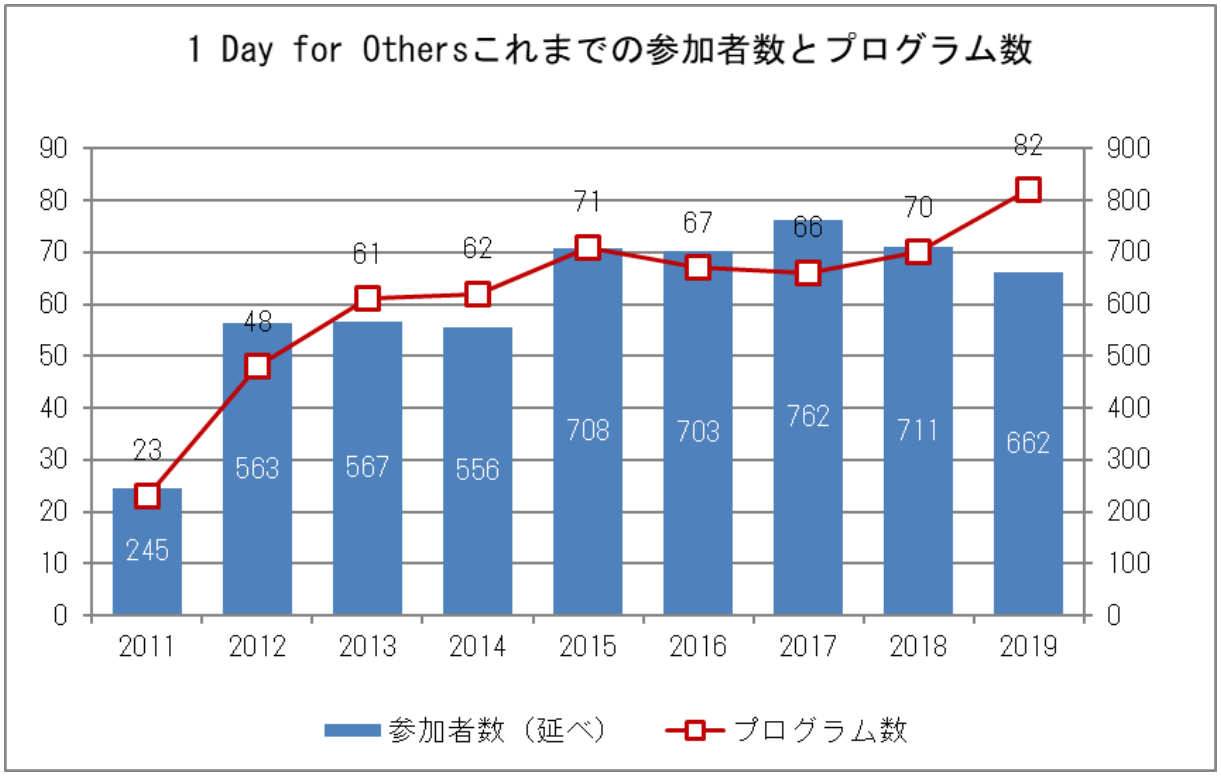
末筆になるが、2011年度より、長きにわたってプログラムを実施し、2020年度に10年目という区切りの年を迎える本プログラムだが、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大に伴い、2020年度春学期の実施中止が決定した。実施中止は、「1 Day for Others」初年度で東日本大震災の影響があった2011年春学期以来となる。プログラムの中止は大変残念であるが、世界の多くの方々が苦難な状況にあるこの事態が一刻も早く終息し、安全にプログラムが再開できる日が来ることを切に願っている。

（職員　青木 洋治）

舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験（特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川）

由比ガ浜海岸クリーン＆ピースプロジェクト（NPO iPleadge）


1 Day for Others2019参加者数（学部別）
160
140
120
100
80
60
40
20
0
22
74
14
43
36
90
26
85
30
115
31
96
文学部
経済学部
社会学部
法学部
国際学部
心理学部
2019春
2019秋


1 Day for Othersこれまでの参加者数とプログラム数
90
80
70
60
50
40
30
20
10
0
900
800
700
600
500
400
300
200
100
0
23
245
48
563
61
567
62
556
71
708
67
703
66
762
70
711
82
662
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
参加者数（延べ）
プログラム数

1 Day for Others 2019 春 プログラムリスト

コース分類	NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加人数
①人とのつながりを実感	1	戸塚区地域子育て支援拠点 とっとの芽	こどもとふれあおう　とっとの芽	4/20	9名
	2	戸塚区地域子育て支援拠点 とっとの芽	こどもとふれあおう　とっとの芽	5/18	6名
	3	横浜YMCAワークサポートセンター　パン工房アンジュ	お手伝いボランティア～自立する障がい者について学ぶ～	5/25	5名
	4	公益社団法人 ジュニア･アチーブメント日本	子どもたちとスチューデントシティで学ぶ！「共存社会」	6/1	5名
	5	明治学院大学 MGオリンピック・パラリンピックプロジェクト実行委員会	おもてなし講座＆観光案内ボランティア	6/1	38名
	6	NPO法人 ぱれっと	ぱれっとミニスポーツ大会	6/1	8名
	7	港区立麻布子ども中高生プラザ	子どもたちと一緒に思いっきり遊ぼう！	6/1	4名
	8	戸塚原宿商店街 松栄会	ふれあいフリーマーケット	6/2	26名
	9	宗教法人 善了寺	デイサービス「還る家ともに」～穏やかな一日をともに体験	6/8	3名
	10	いつでもボランティアチャレンジ　助成団体 ハム	1日でできる手話講座	6/8	23名
	11	ことぶき学童保育	Let's enjoy学童保育～遊びから学ぶこと～	6/8	13名
	12	社会福祉法人　のびのび福祉会	障がい者支援に1日参加しよう！	6/13	1名
	13	戸塚区地域子育て支援拠点 とっとの芽サテライト	とっとの芽で子どもたちと遊ぼう！	6/15	8名
	14	芝の家	多世代交流拠点「芝の家」体験	6/15	5名
	15	みなと子ども食堂	夕食作りを通して地域の方々とコミュニケーションをとろう！！	6/19	2名
	16	コミュニティスペース ふらっとステーション・とつか	戸塚地域の子どもたちと、LEDライトでホタル作り	6/22	3名
	17	スープの会	スープで温める「ホームレス」状態の方々との繋がり～私たちが気づく「路上の出会い」～	6/22	4名
	18	特定非営利活動法人 マドレボニータ	赤ちゃんや、夫婦と一緒にバランスボールエクササイズ！産後の社会問題について一緒に考えよう！	6/29	9名
	19	社会福祉法人 興望館	子どもたちと元気いっぱい遊ぼう！	7/3	3名
	20	戸塚区地域子育て支援拠点とっとの芽 サテライト	こどもとふれあおう	7/6	3名
	21	明治学院大学 アメリカンフットボール部	ゴミ拾いで頂点を目指せ！スポGOMI　MG大会	7/6	3名
	22	フードバンクかわさき	食と心を支えるフードバンク	7/6	2名
	23	戸塚区地域子育て支援拠点 とっとの芽　サテライト	こどもとふれあおう	8/9	3名
②地球規模で社会課題に取り組む	24	特定非営利活動法人国際連合世界食糧計画WFP協会	国連WFP協会　主催イベント「ウォーク･ザ･ワールド」～チャリティーイベントを盛り上げよう～	5/12	23名
	25	柏尾川魅力づくりフォーラム	みんなで川をきれいに！「柏尾川大掃除」	5/12	13名
	26	あーすフェスタかながわ実行委員会	あーすフェスタで多文化交流しよう！	5/18	14名
	27	あーすフェスタかながわ実行委員会	あーすフェスタで多文化交流しよう！	5/19	16名
	28	特定非営利活動法人 ワールドランナーズ･ジャパン事務局	チャリティーリレー for Africa	5/19	22名
	29	特定非営利活動法人　銀座ミツバチプロジェクト	銀座の屋上でサツマイモを植えよう！	5/22	11名
	30	一般社団法人ミャンマー祭り	異文化とイベント運営を学べる場！ミャンマー祭り2019	5/25	8名
	31	一般社団法人ミャンマー祭り	異文化とイベント運営を学べる場！ミャンマー祭り2019	5/26	6名
	32	特定非営利活動法人 アクションポート横浜	横浜のNPOと学生をつなぐ！NPOインターンシッププログラム運営	6/1	4名
	33	一般社団法人　グリーンピース・ジャパン	世界と一緒に！BLUEファッションで鎌倉ビーチをCLEANUP!!	6/8	9名
	34	日本赤十字社神奈川県支部	あなたの一歩が命を救う 赤十字救急法基礎講習	6/15	7名
	35	ファイバーリサイクルネットワーク（FRN）	古着から考えるリサイクル～古着が生まれ変わる手助けをしよう～	6/16	7名
	36	特定非営利活動法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）	オランウータンから学ぼう！ボルネオ島の環境問題	6/16	7名
	37	特定非営利活動法人 国際交流ハーティ港南台	日本語学習ボランティア～様々な国の方々と国際交流をしよう～	6/21	5名
	38	久地円筒分水サポートクラブ	住宅街にも国の登録文化財はある！円筒分水、広場の美化活動に参加しよう！！	6/22	6名
	39	公益社団法人 プラン･インターナショナル･ジャパン	世界の女の子たちの現状を知ろう。～私たちが今動けば未来は変わる！～	6/26	5名
	40	横浜市港南国際交流ラウンジ	認知症サポーター養成講座	7/3	3名
	41	神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）	第20回カナガワビエンナーレ国際児童画展海外受賞者との交流	7/7	8名
	42	ＮＰＯ iPledge	由比ガ浜海岸クリーン&ピースプロジェクト2019	7/13	9名
	43	一般社団法人スリランカビジネス評議会	スリランカフェスティバル2019ボランティア	8/3	17名
	44	一般社団法人スリランカビジネス評議会	スリランカフェスティバル2019ボランティア	8/4	12名

コース分類	NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加人数
③ビジネスで社会課題に挑戦	45	株式会社 マザーハウス	Meet The New World	5/25	12名
	46	株式会社 スワン	障がいのある方たちとともに働くことを考える	6/3	4名
	47	株式会社 ユーズ	あなたの街にも回収ステーションがあるかも？油のリサイクルをイベントを通して体験し・学ぼう！	6/9	4名
④企業の社会的責任 CSRについて知る	48	株式会社 イオンフォレスト（ザ・ボディショップ）	THE BODY SHOPでハンドトリートメントを学んでコミュニティ活動体験をしよう！	6/12	10名
	49	日本電気 株式会社（NEC）	難病・重度障がい者コミュニケーション支援講座＠東京都障害者福祉会館	6/23	8名
	50	株式会社 セールスフォース・ドットコム	グローバル企業とボランティア～自身で考え行動する社会貢献～	6/27	6名
	51	株式会社　資生堂	ライフクオリティーメーキャップ～化粧の力で笑顔を増やそう！～	6/29	15名
	52	株式会社　エイチ･アイ･エス	『旅×地域の課題解決』学生の私たちが創りだす観光アイデアソン	7/6	46名

1 Day for Others 2019 秋 プログラムリスト

コース分類	NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加人数
①	1	戸塚区地域子育て支援拠点とっとの芽	こどもとふれあおう　とっとの芽	9/7	6名
	2	特定非営利活動法人　スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験①	10/5	1名
	3	特定非営利活動法人　スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験②	10/19	5名
	4	神奈川県立地球市民かながわプラザ(あーすぷらざ)	ちひろの水彩技法ワークショップ	10/20	2名
	5	ミナヨク事業　おつかい大作戦プロジェクト	おつかい大作戦プロジェクト	10/26	2名
	6	NPO法人　みなと外遊びの会	2019年度港区　プレーパーク	10/27	2名
	7	神奈川県立地球市民かながわプラザ(あーすぷらざ)	あーすぷらざのハロウィンイベントを盛り上げよう！	10/27	4名
	8	スマートイルミネーション横浜実行委員会	スマートイルミネーション横浜	11/1	8名
	9	スマートイルミネーション横浜実行委員会	スマートイルミネーション横浜	11/2	5名
	10	港区立赤羽小学校	地域と学校が連携・協働した教育活動の実践	11/2	3名
	11	たいしょう食堂実行委員会	たいしょう食堂で地域の人との交流の架け橋になろう！	11/4	3名
	12	港地域パーキンソン病友の会	港地域パーキンソン病友の会支援	11/10	4名
	13	戸塚区地域子育て支援拠点 とっとの芽 サテライト	こどもとふれあおう　とっとの芽	11/16	5名
	14	特定非営利活動法人　スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米づくり体験③	11/16	2名
	15	ミナヨク事業　おつかい大作戦プロジェクト	おつかい大作戦プロジェクト	11/23	2名
	16	明治学院大学 MGオリンピック・パラリンピックプロジェクト実行委員会	おもてなし講座　&　観光案内ボランティア	11/23	15名
	17	とつか区民活動センター	とつかお結び広場に参加しよう！	12/1	3名
	18	芝の家	多世代交流拠点「芝の家」体験	12/7	6名
	19	特定非営利活動法人 アクションポート横浜	横浜サンタプロジャクト	12/14	18名
	20	戸塚区生活支援センター	精神疾患のかたとの交流	12/14	4名
	21	戸塚区地域子育て支援拠点 とっとの芽 サテライト	こどもとふれあおう　とっとの芽	12/21	3名
	22	横浜山手中華学校	横浜中華街で春節を飾ろう！	2/4	10名
②	23	国連ウィメン日本協会よこはま	フォーラムまつりで途上国女性の支援活動を理解するとともに地域の繋がりを深める	10/20	1名
	24	特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト	銀座でサツマイモ掘り！	10/30	8名
	25	特定非営利活動法人JUON　NETWORK(樹恩ネットワーク)	多摩の森・大自然塾～学生編～	11/10	4名
	26	特定非営利活動法人国際連合世界食糧計画WFP協会	高島屋で限定サンタの人形販売　～オリジナルチャリティー商品販売から世界の食糧問題について考えよう！～【午前の部】	11/20	9名
	27	特定非営利活動法人国際連合世界食糧計画WFP協会	高島屋で限定サンタの人形販売　～オリジナルチャリティー商品販売から世界の食糧問題について考えよう！～【午後の部】	11/20	5名
	28	一般社団法人　グリーンピース・ジャパン	MAKE　SOMETHING　草木染めで大量消費社会について考えよう	12/7	3名
③	29	有限会社 ネパリ・バザーロ	フェアトレードの現場を体験し、仲間と共に学びを深め、行動につながるきっかけを	10/26	5名
④	30	パタゴニア　横浜・関内 店	環境問題へ取り組むパタゴニアと「自分はどう行動していくか」を考えよう	12/4	11名

3　ボランティアファンド学生チャレンジ賞（育成・支援プログラム）

職員総括

学生が自ら企画し、その実践を応援する奨励金制度であるボランティアファンド学生チャレンジ。2018年度は、スタートアップ部門２団体、ジャンプアップ部門６団体の計８団体を対象として選定、ボランティアセンターでは年間を通じて伴走してきた。通常のボランティア実践の中から、さらに文字通りジャンプアップしたプログラムを提案してきた団体もいくつか見受けられ、この制度の趣旨が徐々にボランティア活動を行う学生の間に浸透してきているのではないかと思う。

また、ゼミを母体とした取り組みは言うまでもないが、そのほかの団体からも、活動のきっかけとして、履修している授業の中での気づきであったという代表者からの声を複数聞いた。この学びと実践との融合という点も、まさに明学のボランティア活動の大きな特徴であることを改めて感じた。
2019年度は、年間を通して応募ができる新たな制度「いつでもボランティアチャレンジ」がスタ ートした。そのため、この「ボラチャレ」は、これまでのスタートアップ部門とチャレンジ部門と分けていたものを一つにして募集を行った。合計３団体を支援していくこととなったが、うち２団体は昨年も支援をした団体で、その経験をさらにステップアップした内容となっていた。学生たちの自発性を大切にしながら、社会課題にうまく向き合い、地道に取り組んでいくことのできる環境を整えていければと考えている。

（ボランティアコーディネーター　菅沼彰宏）

3.1　ボランティアファンド学生チャレンジ賞2018 活動報告

「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称：ボラチャレ）2018」の募集テーマは「社会課題にチャレンジ！」。審査の結果、以下のプロジェクトが採択された。各受賞団体に奨励金が授与され、2019年9月末日までそれぞれの活動を行った。

●2018年度助成企画【スタートアップ部門】

プロジェクト名	団体名
「できない、やらないのは子どものせい」と思ったあなたへ	小林潤一郎ゼミ
ペットボトルキャップ回収公演	D（アート団体）

●2018年度助成決定企画【ジャンプアップ部門】

プロジェクト名	団体名
全ての犬の幸せの輪を広げるプロジェクト	MGハロードック
YOUは何しに東南アジアへ？	明治学院大学任意団体 NPO 法人 JUNKO Association
『吉里吉里から』を更新し、現在の吉里吉里を知ってもらおう	「Do for Smile@東日本」プロジェクト 明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム
郡上踊り in 戸塚	郡上踊り in 戸塚　学生実行委員会
「HEIWAの鐘」を響かせる	Light House
Meiji Gakuin Old clothes Collection	MGC

●2018年度助成企画【スタートアップ部門】

◇できない、やらないと思ったあなたへ

プロジェクト名	できない、やらないと思ったあなたへ
団体名	小林　潤一郎ゼミ
企画の目的	教員を目指す学生に向けて、障害のある児童とのかかわり方を考えてもらうため。

実施概要

大学生活の中で、実習やボランティアの活動を通して、小学校の中で特別支援学級だけでなく、通常学級に在籍する児童の中にも障害がある児童や、その傾向がある児童がいることがわかりました。

インクルーシブ教育が推進される中、これからは特別支援の勉強をしていない教員でも、障害のある児童と関わる機会は増えていくと考えられます。そこで、小学校の教師を目指す学生に向けてのガイドブックを作成しようと考えました。

ADHD(注意欠陥多動性障害)、LD(学習障害)、自閉症に焦点をあて、漫画を用いてできるだけ具体的な実際に自分たちが目にしたことのあることを事例として取り上げました。

どのように対応すると児童にとっての支援になるのか、障害のある児童との向き合い方を考えるきっかけになれるように言葉や対応方法を全員で議論しました。

完成したガイドブックは、同学年の小学校教員を目指す学生、同じ学部の後輩に配付しました。

感想・活動を通して得た学び

ガイドブックを作成していく中で、改めて自分たちも障害のある児童とのかかわり方を学ぶことができました。今までかかわった児童とのエピソードを共有して考えたり、どう対応すべきなのか、意見を出し合いました。そのなかで、自分一人の考え方だけでなく、いろんな人の考え方を知ることができ、多角的な視点から事例と向き合うことができました。

同じ障害や特徴があるからといって、対応も同じにすることで解決するとは限りません。一人一人の児童にあった対応を見つけることが大切であることを学ぶことができました。

できないときめつけて自分の考えを押し付けるのではなく、児童の側に立って思いをくみ取ることが大切です。

今後に向けて

このガイドブックが、教員を目指す学生にとって、障害のある児童との向き合い方を改めて考えるきっかけになれば嬉しいと思っています。ガイドブックを作成し、配付して終わるのではなく、これからも考え続けることが大切です。卒業までに配付した学生に感想を聞いたり、アンケートを取ることができればよいなと考えています。

（心理学部教育発達学科4年）

ガイドブック完成！

ガイドブック作成のようす

◇ペットボトルキャップ回収公演

プロジェクト名	ペットボトルキャップ回収公演
団体名	D
企画の目的	ダンスとジャグリングのパフォーマンスを本学生や白金校舎近隣の方に楽しんでもらう。来場者からペットボトルキャップを回収し、ワクチン支援に繋げる。

実施概要

アート団体D主催 『るるとわ（ペットボトルキャップ回収公演）』白金校舎アートホール2019年9月30日月曜日17時開場17時30分開演エンターテイメントサークルR.I.E.とコラボしてパフォーマンスをしました。来場者の皆さんにはチケットの代わりにペットボトルキャップをお持ちいただきました。そのキャップをリサイクルした売却利益を「世界の子供にワクチンを日本委員会」に寄付します。ユニセフを通して、ワクチンを支援国に届けます。

感想・活動を通して得た学び

この活動を通して、協力して物事を達成する喜びと、Do for others の精神を身をもって学びました。

今回は、コラボして１つのものを創り上げたので、相手の感覚や考え方や違いにそれぞれが直面しました。時にはそれに驚き、時には救われました。問題を共に解決できた時、一緒に前に進めた時、やっぱりやって良かったのだと確信しました。最後には達成感を分かち合うことができました。

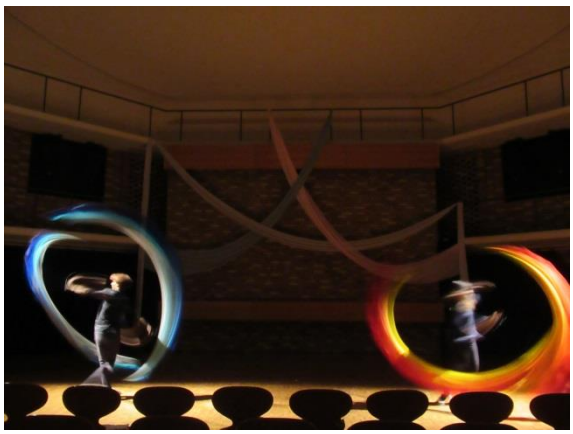
また、誰かが頑張っているから、問題を見つけ困っているから、自分も何か少し手伝おう、協力しようという気持ちをみんなが自然に持ってくれていました。これこそDo for others の精神だと実感しました。ボランティアと直接結び付かなくても、小さな優しさが人を助けるという事を学びました。

今後に向けて

今回学んだ協力して物事を達成する喜びとDo for others の精神を胸に刻み、学生生活やその後の社会生活に活かしていきたいです。

（文学部芸術学科4年）

公演のようす①



公演のようす②

●2018年度助成決定企画【ジャンプアップ部門】

◇全ての犬の幸せの輪を広げるプロジェクト

プロジェクト名	全ての犬の幸せの輪を広げるプロジェクト
団体名	MGハロードッグ
企画の目的	人々の保護犬への関心を向上させる、犬に関する知識の増加およびそれら知識の発信、組織の安定化

実施概要

①戸塚まつり（実施期間2019年5月25日～26日）
　横浜キャンパスにて開催された戸塚まつりに参加（今年で3度目）。
　地域の方々と触れ合いながら保護犬について知ってもらう。
②定期ボランティア（実施期間2019年4月～6月）
　都内の動物愛護施設で保護犬のお世話を行う。
③スタディーツアー（実施期間2019年8月～9月）
　広島県のピースワンコ・ジャパンにて一週間程度泊まり込みで保護犬のお世話を行う。
④今年は、4人×3チームでそれぞれ異なる期間に実施。
　ミーティング（実施期間2018年12月～2019年9月）
　横浜キャンパスでは毎週火曜日、白金キャンパスでは毎週金曜日に実施。
　両キャンパスとも時間は12：25～13：25の昼休み。都合が合えば、電話ミーティングも行う。

感想・活動を通して得た学び

　今年度は1年生が多く加入してくれたこともあり、昨年度よりも活動内容を充実させることができました。戸塚まつりでは例年の内容に3つ追加し、新たに定期的なボランティア活動を実施しました。しかし、ボランティアを初めて行うというメンバーも多いなか、その心構えを共有できずに活動を進めてしまい迷惑をかけてしまった部分もあります。その反省を踏まえ、ミーティングでボランティアや保護犬についての勉強会を実施、活動の前には説明会を開き「どんな目的で行うのか」、「注意すべきことは何か」などの情報の共有を徹底するなどしてサークル内での学習に力を注ぎました。
　そうして知識を深めていった結果、メンバー一人一人の意識が変化し、活動後の振り返りでは「保護犬について正しい知識を伝えていきたい。」「今まで抱いていた保護犬のイメージとは異なり驚くことが沢山あった。」など様々な意見を聞くことができました。

今後に向けて

　今回の反省を活かし、ボランティアをはじめ犬に関する学習および情報の共有を継続させるとともに、継続的で安定したサークルにするために「私たち学生だからこそできる活動とは何があるか」を考えていきます。

（文学部芸術学科3年）

保護犬との交流のようす

保護犬たち

◇YOUは何しに東南アジアへ？

プロジェクト名	YOUは何しに東南アジアへ？
団体名	JUNKO　Association
企画の目的	高校生への将来の選択肢作り、ボランティア啓発

実施概要

　メンバーの母校を訪れ、卒業生が大学入学後に何をやっているか？という観点からワークショップを実施させていただきました。この企画は、JUNKO Associationの活動を大学入学前から認知していたら参加したかったという学生の声から始まりました。

　実施内容は以下の通りです。

●実施場所：大妻多摩高等学校／実施日：2019年6月14日／対象生徒：12名

１．卒業生の自己紹介

…入学後の過ごし方や弊団体との出会いなどを紹介しました。

２．ベトナムとミャンマーの国、活動紹介

３．メンバーによるパネルディスカッション

…参加のきっかけや現地での思い出、活動を通じて感じたことなどを紹介しました。

４．高校生による企画作り（グループワーク）

…4人のグループに分かれて、自分たちにできる国際協力について企画を作成しました。

参加者の高校生には、現地でメンバーが撮影した写真を、グループワークの優勝チームには弊団体が物販しているベトナム製3Dメッセージカードをプレゼントさせていただきました。また、終了後から半年の間、廊下にて写真展を行わせていただきました。

感想・活動を通して得た学び

　この企画を立てた際、計3校で実施が決まっておりました。しかしながら、2校では先方の予定により実施に至りませんでした。突然のことであったため、動揺もしましたが、高校で外部団体がイベントを実施させていただけることが、非常にありがたいことだと切り替え、大妻多摩高等学校1校に集中し開催しました。

初めて高校生向けにワークショップを実施するということで、より丁寧にわかりやすく、そして楽しく実施できるよう心掛け準備をしました。一方で、実際にグループワークを実施してみると、内容が比較的自由であったため、高校生にとっては難易度が想定よりも高かったと感じました。この経験を踏まえて、次回に実施する場合は、1か月前に事前アンケートを実施し、対象の高校生を深掘りをすることで、一人一人の持っている想像力が発揮でき、自由な発想を取り入れられるような内容にしたいと思います。また、このワークショップを通じて、マネジメント・共有・改善方法を模索し仮説検証の大切さを学ぶ機会にもなりました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

そして、事後アンケートでは参加した高校生から高評価をいただき、対象校の先生方からも「またやって欲しい」という声をいただけたことを大変嬉しく思います。お忙しい中、ご協力してくださったボランティアセンターの皆様、大妻多摩高等学校の先生方、誠にありがとうございました。

今後に向けて

　今回の実施をきっかけに、大妻多摩高等学校及び他校において、継続して高校生を対象としたきっかけ作りのワークショップを行えるよう取り組んでいきたいと考えております。また、今回の活動を活かし、将来的には中学校や小学校での活動も視野に入れていきたいです。多くの方々に支えられ、私達JUNKO Associationは来年度25周年を迎えます。現地での活動はもちろん、国内での広報活動にもより一層力を入れて、ベトナム・ミャンマー・日本、での活動に新しい風を吹かせたいと思います。

（経済学部経済学科3年）

メンバーによるパネルディスカッションのようす

ベトナムとミャンマーの国、活動紹介のようす

◇「吉里吉里から」

プロジェクト名	『吉里吉里から』を更新し、現在の吉里吉里を知ってもらおう
団体名	「Do for Smile @ 東日本」プロジェクト明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム
企画の目的	・現地の方々に冊子を通して復興の変遷を改めて感じていただく ・三陸鉄道の開通に伴い、観光客に向けて地域について知っていただく ・関東で発信をする際に震災当時のイメージを持つ人もいる中で現在の姿を知っていただく

実施概要

「Do for Smile @ 東日本」プロジェクト明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラムで以前発行した、吉里吉里地区についての冊子「吉里吉里から」の新刊として作成しました。今回は震災から約8年が経った現在、吉里吉里についてより知っていただけるように、震災当時から活動を続けてきた第三者である私たちの目から見た、熱意や希望を私たちの言葉で届けるために、学生の心に残った言葉、私と吉里吉里、インタビューという項目で一冊にまとめています。実際に地域の方々にインタビューをし、様々なお話を通してメンバーが心に残った言葉をピックアップし文章にしました。その際、読者が吉里吉里に行きたいと思ってもらえるように心がけました。

感想・活動を通して得た学び

軸がぶれないようにテーマに沿って内容を作ることが大変でした。また指導をする人がいない中、自分たちで１から作り上げたので大変だった分、達成感がありました。その中でも、吉里吉里の方やボランティアセンターの職員の方など様々な方にご協力をいただき完成することができました。

このインタビューを通して改めて地域の方々の温かみや優しさ、吉里吉里に対しての想いが強く感じられて自分たちも成長する良い経験になりました。多くの方々に支えられてきたこの活動は終わりがなく、続けることに意味があると思っています。そのため今後も後輩たちに思いを託し、この活動を続けてほしいと思っています。

今後に向けて

吉里吉里の方々や観光客、復興支援や防災に興味がある方に配布をし、今後も冊子の更新をしていきたいと思っています。

（社会学部社会福祉学科3年）

インタビューのようす

◇「おどり」で繋がる地域の縁

プロジェクト名	郡上おどりin戸塚
団体名	郡上おどりin戸塚学生実行委員会
企画の目的	「郡上おどり」を通して戸塚の地域活性化に取り組む

実施概要

岐阜県の盆踊り「郡上おどり」を通して、戸塚の地域活性化に取り組んだ。主に５月の学園祭に合わせて開催する「郡上おどりin戸塚」に向けて学内外での広報活動に力を入れた。学外では、戸塚駅前商店会を中心とする住民と関わりながら地域の課題を知るところから始め、戸塚区主催の地域イベントでの郡上おどりの紹介や、駅前や地域の会合でのチラシ配布を行った。学内では毎週おどり講習会を開催し、SNSでの発信にも力を入れた。回を重ねるごとに講習会の参加人数が増え、総勢150人以上が参加した。イベント当日は郡上の人、郡上おどりファン、明学生、戸塚住民など、世代や地域を越えた交流の場が生まれた。

感想・活動を通して得た学び

ボランティアへの向き合い方を変える経験ができた。活動当初は、戸塚駅前の地域活性化のためにできることを考えたり、戸塚で郡上おどりをすることの大義名分を考えるなど、「やったほうがいいと思われること」をこなすような、ある種自己犠牲的なボランティアをしていた。しかし先生方の助言もあり、もう一度学生としてのボランティアの在り方を考え直したことで、自分達が「やりたいこと」を中心に活動することができるようになった。実際に学内外で郡上おどりを体験してもらう機会を数多く作り、発信し始めてからは、賛同者が増えたり、自分達の周りを取り巻く環境が好意的に変化していったことを感じた。特に今年は例年と違い、お囃子無しでの開催となったのにも関わらず、学園祭では例年以上の盛り上がりを見せたことが一番の成果だったと思う。課題の解決に向けて動くことだけがボランティアではなく、おどりで繋がる新しい形の地域づくりに向けて、多くの人を巻き込んでいくこともボランティアなのだと考えることができた。

今後に向けて

次年度も団体として活動していく方向である。来年は、戸塚まつり内の郡上おどりの場をさらに意味あるものにするために、横浜キャンパス近辺の住民との交流の場を増やしていきたい。また、多様なルーツの人たちがおどりを通して交わることができるような場づくりについても考えながら企画を進めている。郡上おどりが戸塚で行われ始めたのは、地縁ではなく人との縁からである。今後も郡上おどりを通して、今ある縁をより濃いものにし、そして学生主体で繋げる縁をより広げていくために、活動していきたい。

（国際学部国際学科4年）

踊り講習会のようす

団体メンバー集合写真

イベント当日の集合写真

◇「HEIWAの鐘」を響かせる

プロジェクト名	「HEIWAの鐘」を響かせる
団体名	LightHouse
企画の目的	若者の戦争認識、戦争体験者の高齢化による戦争の風化対策

実施概要

合唱曲「HEIWAの鐘」を通して沖縄の戦争や基地問題について学び、歌詞解釈とともに現地での学びを紹介するホームページを作成する。

沖縄の戦争や基地問題について学習→「HEIWAの鐘」の歌詞解釈を考察→沖縄現地に赴き、作詞作曲者の仲里幸広さんに直接インタビュー→体験的に沖縄の戦争を学ぶべく、現地の平和資料館等を訪問→ 沖縄の歴史についてまとめた記事を作成→ホームページの開設。

感想・活動を通して得た学び

今までメディアを通してイメージしていた沖縄も実際に行ったことで様々な発見があった。例えば、沖縄には壕やガマの跡など戦争の跡が残されている場所が多くある。また、基地問題の騒音についても実際に行ってみなければどれほどの負担を住民が感じているのかわからない。

特に印象的だったのは他の平和祈念資料館や平和記念公園の展示方法の違いである。沖縄の資料館や祈念公園は東京のものより大規模なものが多く、戦没者の数だけでなく顔や名前を展示するなど、ひとり一人の死を悼み敬う姿勢が表れていると感じた。それは琉球言葉で「ヌチドゥタカラ」＝人の命を大切にするという心が今でも沖縄の人々に刻まれているからではないだろうか。戦争体験者の高齢化が進み、記憶風化が危ぶまれる中で戦争を知らない世代に継承するために何ができるのか。その一つとして、人々の記憶に残る展示というものを沖縄に行って学ぶことができた。

今後に向けて

・ホームページの更新、周知作業を行い「HEIWAの鐘」を合唱曲として歌う中高生を中心により多くのひとに活動を知ってもらう。
・学内で沖縄学習報告会を行い、沖縄での学びを明学生にもシェアする。
・任意団体Peace☆Ringの活動と平行して、戦争の記憶の継承問題に取り組んでいく。

（国際学部国際学科2年）

「HEIWAの鐘」作詞作曲のユキヒロさんと

ひめゆり平和祈念資料館　仲田さんと

ホームページURL: https://light-house.jimdosite.com/

◇Meiji Gakuin Old clothes Collection

プロジェクト名	Meiji Gakuin Old clothes Collection
団体名	MGC
企画の目的	ファストファッションの流行によって起こり得る、人権、貧困、環境問題を改善することを目指す。

実施概要

学内で毎週火曜日のお昼休みに集まり、ショーの内容や方針をミーティングにて決めた。また、古着を学内の学生から定期的に集めた。そして集めつつこの活動の告知も行った。

集まった古着をリメイクした衣装を使用し、ファッションショーをすることによって、捨てるはずだった洋服でもこんなにキラキラするということを来場者に伝えた。

当日は入場料を一人300円ずつ集め、フェアトレード専門ブランドPeople Treeの親団体であるグローバル・ヴィレッジ へ寄付を行った。フリーマーケットでは集めた古着を100円から販売し、そのほかに購入者の気持ちによって寄付をしてもらった。

結果として、参加者50～60名を超える来場者と44,500円ほどの寄付金が集まった。

感想・活動を通して得た学び

「The True Cost」というファストファッション業界のビジネスの闇を描いた映画を見たことで始めた活動だった。ファッションを自由に低価格で当たり前のように楽しんでいる私たちはそれに伴って起こり得る弊害を全く理解していない。知らないことが悪であるとも考えたが、知らせるような世界になっていないことが一番の原因なのではないかと考え、このような現状をできるだけ多くの人に伝えられるような活動にしたかった。また、ボランティア＝慈善活動、偉い、堅い、つまらなそうという意識を変えたいと思っていた。今回、この活動を通してたくさんの人がファストファッションというもの、どのように自分の服が作られているのかに興味を持ったといわれることが多く、私たちの思いが伝わることがどれだけうれしいかを知った。どんなに過程が大変でも誰かに影響を与えることの喜びをメンバー全員が感じることができた。また、どのような形の支援をすることが一番解決につながるのかと活動をしているとき、常に考え、意見を出し合った。過酷労働を強いられている人の人権問題や貧困、大量消費社会が環境にもたらす影響なども考えつつ、ショーでもなるべくゴミがでないように装飾も古着を使って行い、フリーマーケットでも袋の配布をしないように配慮した。一番はメンバーで一から何かを作り上げることへの達成感をもてたことが大きな学びだった。

今後に向けて

今回、このような素敵な機会に恵まれ、中間活動報告会として行った“浴衣祭り”では他のボランティア団体とコラボレーション企画ができたことがとてもよかった。この活動を続けていくとしたら、いろいろな団体と協力して活動をしていきたい。また、ファッションショーという形以外でこの問題を広めていける方法を模索し、続けていきたい。

（国際学部国際学科2年）

ファッションショー当日のようす①

ファッションショー当日のようす②

3.2　ボランティアファンド学生チャレンジ賞2019採択団体一覧

2019年度の募集は「社会課題にチャレンジ！」をテーマとし、書類審査･面談を経て8プロジェクトが採択された。各受賞団体に奨励金が授与され、2020年9月末までそれぞれの活動を行う。各団体は、部門によって活動報告会での発表や活動報告書を提出し、今後につなげるため自分たちの活動を振り返ることが求められる。

●2019年度助成企画

プロジェクト名	団体名
海洋保護プロジェクト ～Substitute for Plastic～	MGU Sea Turtle
Night Cinema Festival in Zenryou-ji	MGCloset
郡上おどりin戸塚学生プロジェクト	チームMG郡上

4　いつでもボランティアチャレンジ　通称：いつボラ（育成・支援プログラム）

教員総括

「いつでもボランティアチャレンジ（略称　いつボラ）」は、本学在学中の学生・院生が自ら企画したボランティア（社会貢献）を実践したいと思った「その時」に申請できる援助金制度として構想された。2007年に始まった「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（略称　ボラチャレ）」は年一回11～12月に応募・選考を実施してきたが、これでは災害発生時の支援など、学生がボランティアをしようと考えたときに即座に対応するのが難しい。いつボラはいつでも申請ができ、申請があり次第ボランティアセンターの教員（ボランティセンター長、ボランティアセンター長補佐）、職員（含むボランティアコーディネーター）で面談を実施して、助成の可否を判断する。

応募要項は、以下のようになっている。

■応募資格：
【個人】明学生（休学・停学中の学生は申請できません）。
【団体】明学生のみで構成されている団体。
※採用は2回まで。年度毎の援助資金がなくなり次第、募集を終了します。
■応募条件：
・「社会貢献活動」であること
・活動終了後1カ月以内の①報告書作成、②実施した活動発表
・指定期限内の使用援助金領収書提出と使途報告
■応募方法：「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」をボランティアセンター窓口またはメールで提出。
■選考方法：申請書類と面談で選考し、結果を代表者宛にポートヘボンで通知。
■助成内容：
【個人】2万円、【団体】5万円を上限とする必要金額。
※選考時に減額されることがあります。
※申請予算を使い切らなかった場合は、残金を返金する必要があります。
■援助対象：活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費（文房具、DVD、軍手、長靴など）、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、 使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など）
※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用

いつボラの始まった本年度は8件の申請があり、面接の結果6件（総額147,027円）の助成を決定した。このうち既存のボランティアサークルやボランティアセンターの学生セクションをベースに提出されたものが4件、授業個人として申請されたものが2件である。分野としては、聴覚障害者理解、海外支援にかかわるものが4件、障害者支援にかかわるものが1件、災害支援にかかわるものが1件となっている（次ページの一覧を参照）。助成するに至らなかった2件のプロジェクトについても、実現できるように引き続き相談に乗っている。

受付日	プロジェクト名（カッコ内は概要を補足）	決定額	申請者（団体の場合は団体名）
4月19日	1日でできる手話講座	¥37,100	ハム（手話サークルぽっけ内有志）
5月10日	フィリピンコーヒー農家支援事業（インターン先農村の民芸品販売による支援）	¥4,000	フィリピンコーヒー農家支援団体Salamat（
6月3日	もったいない思いやりを世界中の子どもへ（不要外貨・文房具等の回収・提携団体を通じた寄付）	¥10,000	学部生個人（国際キャリア学科の授業の履修学生が中心）
10月2日	千葉災害ボランティア(台風15号被災地での住宅復旧支援）	¥17,000	学部生個人（2名）
10月3日	Girls Project（性差別やジェンダー不平等に対する意識の啓発）	¥10,000	海外プログラム事業部
11月8日	YOUは何しに東南アジアへ？2nd（出身校でのワークショップの実施）	¥30,000	JUNKO Association

【活動報告書】

学生団体

ハム

いつでもボランティアチャレンジ活動報告書

「1日でできる手話講座」

聴覚障がいを持つ人との関わり方が分からなく話せないという学生が多いと感じ、より多くの人に関わり方を知ってほしいという気持ちから始まったプログラムの第2回目です。
手話に興味がある、聴覚障がいを持つ人と関わってみたいという学生を募集しました。

プログラム当日

午前は感覚障がいについて説明をし、アイスブレイクを兼ねてグループごとに「声なし自己紹介」をやりました。最初は好きな食べ物についてマスクを書けて、声を出さずにジェスチャーなど、自由に表現してもらいました。手話をやる上で表情が「表情」と「口の動き」を観察していただき、それから手話での自己紹介、簡単な挨拶をレクチャーしました。

午後は、日常会話で使える手話の講座をしました。スタッフが用意した手話冊子の単語をグループごとで手話のゲームや会話を通し、楽しみながら進めていきました。

プログラム最後のフリートークでは、講座に出なかった単語などを交え、参加学生とたくさん「手話」を使ってお話しすることが出来ました。

参加学生は最初「手話って難しそう」という雰囲気があり緊張している様子でした。しかし、少し学ぶだけで相手の手話が理解できる、自分の言葉が手話で表現できることを実感してからは緊張が解け、手話を積極的にたくさん使って話してくださいました。このことから、少しでも手話に触れる機会さえあれば聴覚障がいの理解が広まると改めて感じました。そのためにも、私たちの活動は定期的に行うことに意味があると学びました。

フィリピンコーヒー農家支援団体

Salamat

いつでもボランティアチャレンジ活動報告

活動実施日：2019年5月25・26日　戸塚まつり

昨年12月のフィリピンコーヒー農園インターンシッププログラムに参加した学生を中心に、フィリピンの首都マニラから車で12時間、インターン先のサガダ村で作られたポーチを戸塚まつりで販売しました。明学生や地域の大人の方々、子供たちなど、多くの方のご協力により約150個のポーチを無事完売し、現地の農家さんがコーヒー豆の皮を乾燥させる際に使用する乾燥台を6台購入できる費用を創出することができました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました！！！

この企画を通してインターンでの学びを多くの方へ共有するためにポーチ販売のほかにも様々な取り組みをしました。

インターン2期生による写真展

パワーポイントを使った発表

フォトムービーの上映

写真アルバムの設置

今回の活動は、乾燥台の購入費用の創出に繋がっただけではなく、コーヒー農園の実態やコーヒー産業を取り巻く課題、さらにそういった問題の解決に向けてどのような活動がされているのかなど、インターン生が現地で学んだことの共有の場にもなりました。
学んできたことをそのままにせず、「自分たちにできること」を実践することで、改めて現地の方々のことを考えるきっかけになりました。
私たちと皆様の想いがこもった乾燥台によって、現地の農家さんを少しでも幸せにできたらと思います。

国際キャリア学科

Capstone Project（上村、佐山、栗田、平林）

いつでもボランティアチャレンジ活動報告書
実施日時：2019年6月25日（火）～　7月18日（金）
@横浜キャンパスボランティアセンター

<もったいない思いやりをウガンダに>

国際キャリア学科の授業内で「SDGsと関連があるプロジェクトを実施している団体とコンタクトを取り、SNSを用いて広報し成果を出す」という課題が出た事がきっかけとなりました。チーム内に以前、ジュンコアソシエーションのプロジェクトで発展途上国の子供たちに支援物資を届ける活動をした者がおり、類似した活動を行っている学外の団体を探し、もったいないジャパン様との支援活動を実施しました。この活動では、外貨・文房具類（未使用のペン、ノートなど）を主に回収しました。寄付された外貨は文房具類を送る際に必要になる送料に換金され、発展途上国の子供たちに届きます。今回の活動で集まった外貨・物資は7月～8月中に団体を通してアフリカのウガンダにある孤児院へ届けられる予定です。

- ノート：6冊
- ペン：6本
- ドル紙幣：12,105円
- その他紙幣＆
  コイン：約1,000円

を寄付していただきました。

外貨には米ドルの他に…
- トゥグルク（モンゴル）
- シンガポールドル
- リンギット（マレーシア）
- バーツ（タイ）
- リエル（カンボジア）

などがありました。

私たちはこの活動を通じて、改めて社会の一員としての責任を感じました。私たちが海外旅行という娯楽で使った外貨の余りが、遠い国の子供を救うことに役立つ。普段、何不自由なく暮らしていると気づきにくいですが、些細なことで誰かに救いの手を差し伸べることができるのだと改めて感じました。また、どのような工夫をすればより多くの方に支援したいと思っていただけるか考え、回収ボックス作りや動画制作など、試行錯誤した活動期間でしたが、とても良い経験になったと感じています。

災害ボランティアレポート

台風により被害を受けた地域でのボランティア活動に参加した学生2名に報告をしてもらいます。2人は活動に際し、ボランティアセンターの「いつでもボランティアチャレンジ（学内支援制度）」も活用してくれました。ボランティアセンターでは学生個人の活動相談にものっています。

災害ボランティアセンターの展示：富津市内のボランティア派遣状況

富津市役所（この中に災害ボランティアセンターが設置されている）

千葉県富津市で台風により被害を受けた家屋のブルーシート張りをしてきました。

私たちが担当した家は、玄関や窓ガラスが程程残っておらず、外から中が丸見えで家具が積み重なって足の踏み場がない状態でした。実際に作業に取り掛かると、力仕事よりブルーシートの補強の仕方など頭を使うことの方が多かったように思います。

作業後に聞いた災害ボランティアセンタースタッフの話では、「自然災害は建造物以外に、人の心にもダメージを与える」ことも教えてもらいました。物資の援助や家屋の修復が主な災害ボランティアと思われがちですが、被害にあった人の心のケアも大事な災害ボランティアの一つと気づきました。

英文学科1年　樋之口　帆風

窓にブルーシートを張り、更なる風雨被害を受けないようにする

ブルーシートを玄関や窓のサイズに合わせてカット、補強する

災害ボランティアを初めて経験しました。以前は災害ボランティアと聞くと力仕事の印象が強く、女性にできることは少ないのではないかと思っていました。しかし行ってみるとニーズによって細かく仕事が分けられ、学生や女性の力ができる事も沢山ありました。また、チームを組んで下さった方や現地のボランティアセンターの方にお話を聞き、物理的ではないことも含め予想以上に沢山の支援が必要であることを知りました。

また先程述べたような災害ボランティアの印象からか、防災グッズを揃えた時にあまりに女性用のものが少なく驚きました。今後はこのような固定概念を無くしていく活動もしてみたいです。

国際学科1年　米山　綾乃

台風被害を受けた家の玄関：ブルーシートを張る前

作業終了後：左から窓・窓・玄関

2019/11/5(TUE)~11/8(FRI)

Girls Projects

by　海外プログラム事業部

去年の同イベントは国際ガールズ・デーに合わした1週間、ピンクレモネード販売を通じて世界で起きているジェンダーの不平等、女性の人権・エンパワーメントについて明学生に興味・関心を持ってもらう啓発活動をしました。そして、今年は国際ガールズ・デーに合わせず、クララ・ラウンジで11月5日から8日を明学ガールズ・ウィークと表して、ピンク色の綿菓子の配布、男性・女性のジェンダー観における意識調査・対話や UN Women 親善大使のアン・ハサウェイとエマ・ワトソンの国連スピーチなどといったジェンダーに関する幅広いトピックを扱った動画の上映また、世界の女の子たちを支援している国際 NGO のプラン・インターナショナル・ジャパンへの募金箱の設置といったことを行いました。こうした活動をすることで明学生たち自らのジェンダー意識について見つめ直してもらうとともに世の中に起きている性差別・ジェンダーによる不平等といった問題に対する意識の向上を目的としました。

「明学全体にムーブメントを起こす！！！！！」を目標に始まった2019年ガールズ・セクション。しかし、4日間のイベントでは足を運んでくれる学生が思うように増えず、イベント期間も試行錯誤の繰り返しでした。そのため1日1日、その日の振り返りを行うことによって自分たちが本当に行いたかったイベントに近づけていくことが出来ました。この経験から、興味が無い学生に対したアプローチ方法などを学ぶことが出来ました。また、動画を見た学生が自分たちでも出来る行動として募金を行う姿を見られことが改めて私たちのジェンダー意識を確認するきっかけともなりました。

YOUは何しに東南アジアへ？No.2

JUNKO　Association

国際協力活動を行う学生を身近に感じ、今後の将来のビジョン形成に役立ててもらうことを目的に、メンバーの母校を訪れ、ワークショップを実施

- 実施場所：群馬県立太田女子高等学校
- 実施日　：2019年11月19日
- 対象生徒：20名

卒業生であるメンバーによる自己紹介と参加したきっかけについて話しています。

1. 卒業生の自己紹介
   →大学入学後の過ごし方や弊団体との出会いなどを紹介
2. ベトナムとミャンマーの国、活動紹介
3. メンバーによるパネルディスカッション
   →参加のきっかけや現地での思い出、活動を通じて感じたことなどを紹介
4. 高校生による企画作り（グループワーク）
   →5人のグループに分かれ、JUNKOの交流校であるハンターイエの課題解決に取り組む企画を作成
   また、終了後から一年間、廊下にて写真展を開催

感想・活動を通して得た学び

2019年6月にボラチャレで行った(22ページ参照)初めてのワークショップを終え、時間配分やワーク内容など様々な反省が出ました。その反省を生かし、今回のワークショップを実施することができました。太田女子高等学校は、海外志向の学生が多く、テスト前の放課後にも関わらず高校1年生から3年生までの20名の生徒にご参加いただきました。

前回、ボラチャレで行ったワークショップと比較し、大きく変更したのは企画内容です。前回は、自分たちできることを中心に考え、企画作りを行ったことで幅広い意見が集まりましたが、抽象的なものになってしまいました。そこで、今回は活動地ハンターイエについて学び、あらかじめヒントや方向性を示したうえで企画作りに挑戦していただきました。そのため、前回よりも1時間ほど短い時間で、且つ出できたアウトプットも質の高いものとなりました。どのチームも非常に個性的でユニークな発想で立案されており、私たちが実際に行っている交流に応用できそうなアイデアがいくつもありました。高校生の想像力と活動に対する理解の速さには非常に驚かされました。

今回のワークショップをきっかけに、新しい発見や国際協力やボランティア活動に少しでも興味を持っていただけたら、心から嬉しいです。

JUNKO Associationとその他の海外ボランティア団体の活動紹介しました。

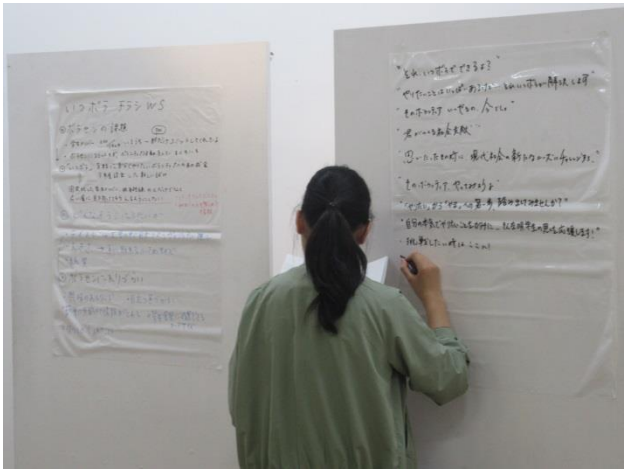
今後に向けて

前回行った大妻多摩高等学校、そして今回実施させていただいた太田女子高等学校においては今後継続的に交流を行っていきたいと思っております。また、放課後ワークショップという形で、この2校のみならず、様々な高校や中学校に呼んでいただけるように日々の活動と並行して努めていきたいです。次回開催までに内容を再検討し、新しい発見があるようなものにしたいです。グローバル化が進む日本で、国際協力の在り方や姿勢を模索し、等身大で感じたことを伝えていけたらと考えております。

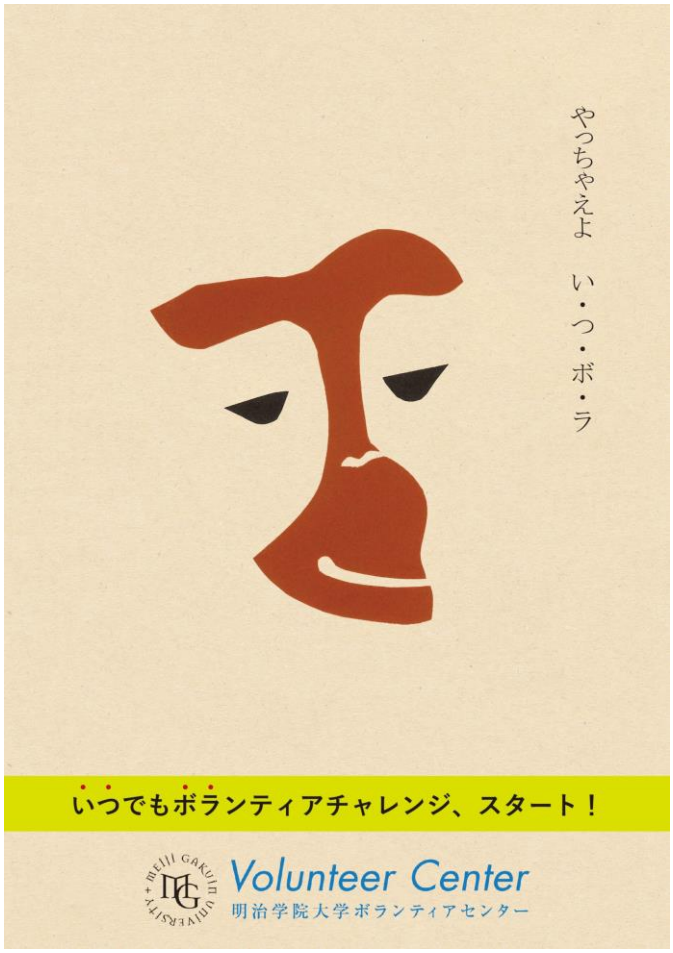
経済学部経済学科3年　浅見友美子

いつボラの広報用チラシについては、NPO法人エイブルアート・ジャパンの協力を受け、本学の学生4名が参加してワークショップを実施し、内容とデザインを決定した。ボランティアセンター内だけでなく、関係する教員の授業を通じて配布した。

【ワークショップの様子】



【完成チラシ】



今後の課題として、学生や教職員への周知を引き続き広げていくことがまずあげられる。そのためには、いつボラの活用イメージを広げる必要がある。たとえば、自分のボランティア活動をもとに卒業論文を執筆し、その成果を活動団体へフィードバックしようとする学生に対して、その活動・調査の補助をすることが検討できる。現在の活用範囲は、3年生以下の学部生が中心となっているが、このような情報を学生・教員に発信することで、4年生や大学院生の活用にもいつボラの活用につながると考えられる。

また単に援助金を出すだけでなく、社会課題や、地域や社会のニーズを発見した学生が、実際に行動に移すためのノウハウを提供し、外部の資源（人材、情報、金銭）とつなげていく、ボランティア・コーディネートの役割も重要になってくる。

あわせて、いつボラを活用した学生が持続的な活動を志向した場合、ボラチャレや外部団体の助成を申請する支援や、学生部管轄の公認団体などの移行の支援など、活動をより高度化させていくための支援体制も検討すべきと考える。

（ボランティアセンター長補佐　猪瀬浩平）

5　国際機関実務体験プログラム（育成・支援プログラム）

職員総括

横浜・みなとみらい地区の国際機関で100時間の実務体験を行うプログラムで、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）と本学を含めた6大学との協働事業となっている。

国際協力や国際交流の実務を体験することにより、大学で習得した学問と実務機関での実践の融合をはかり、将来、国際性豊かな資質を持ち世界的な問題を視野に入れて活動することができる人材育成を目的とする。

実務体験は、夏期と春期に行われ、派遣国際機関は6大学で分けられ、2019年度夏期は、独立行政法人国際協力機構　横浜センター（JICA横浜）、公益財団法人　横浜市国際交流協会（YOKE）、春期はアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）、国際連合食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所へ各1名ずつの派遣が本学の割り当てとなった。

このプログラムに参加した学生たちが体験を終えた後、一回り二回りも成長していることを実感する。

（職員　金子美咲）

◇2018年度春期プログラム　実績（1名）

派遣学生 所属・学年	国際学部国際学科　4年
派遣先	国際連合食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所
活動内容	・イベント手伝い ・自ら設定したテーマに沿った研究、発表 ・翻訳作業（プレスリリース、ツイート、ホームページなど）

※紙面の都合上、2018年度春期プログラム実績を本報告書に掲載しました

◇2019年度夏期プログラム　実績（2名）

派遣学生 所属・学年	国際学部国際キャリア学科　1年
派遣先	独立行政法人　国際協力機構　横浜センター（JICA横浜）
活動内容	・図書資料室補助（蔵書確認、研修資料の整理） ・イベント補助（子どもアドベンチャー、アフリカデー、ベトナムフェスタ） ・展示の入れ替え/整理 ・研修の同行 ・研修員へのインタビュー記事の作成 ・JICA横浜での最終報告会 （展示、移住資料館案内、プレゼンテーション）
派遣学生 所属・学年	心理学部教育発達学科　3年
派遣先	公益財団法人　横浜市国際交流協会（YOKE）
活動内容	・鶴見国際ラウンジにて外国につながる子どもに夏休みの宿題講座を運営、指導 ・「たずねよう！横浜国際協力センター」のための自主企画実習 ・国際機関合同研修会/SDGs研修 ・最終報告会の運営、活動報告

◇2019年度春期プログラム　実績（2名）

派遣学生 所属・学年	国際学部国際学科　3年
派遣先	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）
活動内容	・学生との会話セッション 授業後に約 30 分間学生と 1 対 1 の会話パートナーとして、日常的な会話を日本語で行った。 ・授業への参加 少人数クラスで文学、政治経済、歴史、大衆文化、政治経済、法律、実践的な会話の授業に参加した。議論では意見交換をし、学生の発表の場では内容について質問をした。 ・データの打ち込み作業 学生の日本における経験を含む学歴や職歴など個人情報をスタンフォード大学事務局と共有しているデータベースへ入力した。 ・日本財団フェロー前期発表会の参加 日本財団の奨学生 9 名の研究発表会を聴き、日本研究への理解を深めた。
派遣学生 所属・学年	社会学部社会福祉学科　4年
派遣先	国際連合食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所
活動内容	・FAOに関するスライド資料作り ＊本資料を元にイベントの講演をしていただいた ・Twitterなどの広報 ・ファイル、書類整理 ・個人研究 ・FAO駐日連絡事務所所長のイベントに付き添い

6　Gakuvo Style Fund（育成・支援プログラム）

職員総括

ソニーマーケティング学生ボランティアファンド（以下ソニー）を引き継いで、2014年度から支援活動を開始したGakuvo Style Fund（以下ガクボ）は、全国の学生主体の団体への活動支援のために、こらぼ（既存の枠組みにとらわれずに他の組織との連携による活動　上限20万円）、ゆるぼ（活動を立ち上げたばかり　上限10万円）、ばかぼ（精力的に活動を行っている　上限30万円）に分類し、過去6年間で214団体に4,072万円の助成を行った。

6年目の支援を終えた今、支援する立場から見た課題を挙げると、ひとつは当制度に対する支援する側とされる側の意識の乖離である。支援する側としては資金援助することで一回りも二回りも成長することを望んでいたが、支援される側は当面の活動が成功裡に終われば良いという認識。特に常連となった団体に顕著であり、毎年同じような活動を助成を受けながら行い、活動自体は安定しているものの、結果として3回目、4回目の申請で成長が見込めない団体よりも荒削りでも成長の期待が持てる団体に援助する結果となって現われた。もう一つは資金獲得の機会が多様化である。クラウドファンディングに代表されるように、様々な資金獲得、応援者獲得のチャンスが、このネットワーク社会のあちこちに存在するようになった。こうした現状を鑑み、ガクボは一定の成果を果たしたと判断し、2019年度をもって終了することとした。

ソニーが立ち上がった2001年から19年にわたり、産学協同による支援活動を事務局の立場からすると、一抹の寂しさはある。しかし、郷愁よりも活動報告会等の運営スタッフとして参加していた本学学生が他大学と交流する機会が失われることのもったいなさを感じる。本学としてはここで培ったノウハウを、本学独自の支援制度である「ボランティアファンド学生チャレンジ」「いつでもボランティアチャレンジ」で活用して本学生の活動をより有意義なものへの導き出していきたいと考える。

最後に、本学とともに19年にわたり学生支援のパートナーであったソニーマーケティング株式会社および、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンターに感謝を申し上げる。

（職員　波多野洋行）

●2019年度「Gakuvo Style Fund2019」の主な活動

日にち	内容
5/19(日)	第5回活動報告会開催
5/7（火)～5/21(火)	Gakuvo Style Fund2019募集期間
5/22(水)～6/4（火)	一次審査期間（事務局による書類審査)
6/5（水)	一次審査通過団体通知
6/6（木)～6/21(金)	二次審査期間（審査委員による書類審査)
6/29(土)	最終審査会開催
7/1（月)	審査結果発表
7月下旬	採択団体の指定の口座宛に協力金振込
8月～9月	活動期間/活動ウェブ報告期間
12/7(土)	活動シェア会開催

7　学生事務局

学生事務局長総括

ボランティアセンター（以下ボラセン）は、2018年度に設立20周年を迎え、新たなステージへと進んだ。2019年度を振り返ってみれば、20年の歴史を踏襲しながらも、過去のしがらみに囚われすぎない新しいボランティアセンターをつくるべく学生・教職員共に新たな形を模索した1年だといえるだろう。その模索した結果が、既存の７セクションのボラセン所属という形の解消だった。おそらく学生の多くがボラセンとセクションの距離や関係に疑問を感じながら活動した経験があると思う。その経験は、各セクションの活動が行き着くとこまで到達し、新たなステップへと向かう時期だという事を証明しているからであろう。とは言っても、教職員の方々も熟考の末の決断だったと思う。

決定の伝達時には、多くの学生は、困惑を隠し切れない様子だったが、不満をこぼしつつも、自身のセクションの今後を真剣に真面目に考えている様子を俯瞰していると、私の考えていた以上に明学の学生として、ボラセン所属の学生の質の高さを改めて痛感したとともに、誇らしく感じた。いかにセクションを始め、ボラセンが愛されていたかを再認識することとなった事は間違いない。

当初、ボラセンの改革の話を聞いた時には、寂しい気持ちと納得の感情の間で揺れた。学生の立場と学生事務局長との立場にも困惑した。私自身も今の形態のセクションやボラセンに愛着を感じていたし、そこに変化がある事は、正直良い気持ちではなかったし、抵抗すべきだったのかとも自問した。しかし、3年間メンバーとして活動したからこそ、教職員の方々の熱意ある構想を聞いて、それが、各セクションの活動にとってプラスになるという確信を持つことができた。

最後に、各セクションの学生やOB・OGには、結果的にボラセン所属のセクションという形が解消することになり、申し訳なく思う。おそらく私を含めた全員が、ある種の喪失感を共有していると思う。しかし、この転換がセクションとボラセンの双方にとって、興隆を促すこととなるという事は間違いないし、明治学院大学ボランティアセンターはさらに魅力的なものになっていくと思う。

（学生メンバー　法学部政治学科3年）

●2019年度「学生事務局」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
12/21（土）	ボランティアセンター活動報告会 （学生セクション所属学生 約90名）

◇2019年度ボランティアセンター活動報告会

目　的	ボランティアセンター所属の学生セクションの活動報告と、2020年度からボランティアセンター所属団体でなくなることを学生メンバーで共有し、今後の団体活動や取り組みについて考える機会とする。
場　所	白金キャンパス　3101教室
活動内容	各セクションの年間の活動報告/学生交流
活動日時、参加人数	2019年12月21日（土） 約90名

8　「Do for Smile@東日本」プロジェクト（東日本大震災復興支援）

8.1　明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム

学生チーフ総括

2020年で東日本大震災から9年が経つ。昨年度、学習支援活動の終息を迎えたこともあり、今年度は全ての活動をもう一度見直す時期がきたように感じた年だった。吉里吉里地区が変化していくとともに私達の活動も変化していく必要がある。昨年の活動中に学生が感じたニーズの変化から、この一年間は活動をどうしていくのか「考える一年」とした。具体的にどのようなことが求められているか把握するために、地域の方にお話を聞く機会を増やした。そのうえで、活動を継続するのか、それとも終息するのか。私達にできることは何かもう一度見つめ直していくうちに「吉里吉里とつながっていたい」という気持ちが強くあったことに気がついた。一方でこのままの活動ではいけないという思いもあった。そこで、今後私達の団体はセクションメンバー以外の明学生を呼び込み、一緒に活動することで今まで以上に視野を広げ、現地のニーズに対応した活動をしたいと考える。

2019年には、2012年から発行を始めた冊子『吉里吉里から』の3冊目を発行することができた。来年度は吉里吉里のことや本活動のことを「発信する一年」として活動に取り組んでいきたい。新体制を迎えることは不安もあるが、それ以上に期待の気持ちが大きい。学生である私達の力は微々たるものかもしれないが、2011年から活動してきたこの団体と大槌・吉里吉里のつながり、学生だからこそできることを強みに今後も励んでいきたい。

（学生メンバー　法学部消費情報環境法学科3年）

●2019年度「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム」の主な活動

日にち（移動日含む）	内容（参加人数）
5/24（金）～5/27（月）	吉里吉里学園小学部運動会に参加（3名）
5/25（土）	大学祭「戸塚まつり」で「デコ鮭」ワークショップを実施（7名）
6/28（金）～7/1（月）	スタディツアー（14名）
7/31（水）～8/7（水）	吉里吉里学園小学部で「サマースクール（コラボ・スクール）」に参加（13名）
8/26（月）～8/30（金）	吉里吉里学園小学部での授業「ふるさと科」に参加（5名）
10/4（金）～10/7（月）	「吉里吉里大運動会」（地域の運動会）に参加（3名）

◇吉里吉里学園小学部運動会

目　的	・小学部の生徒が円滑に進行できるようにサポートする ・運動会を通して地域との交流を図る
場　所	大槌町立吉里吉里学園小学部
活動内容	吉里吉里学園小学部で実施された運動会のお手伝い等
活動日時、参加人数	2019年5月25日（土）9:00-14:40 3名

◇戸塚まつり

目　的	現地のみの活動ではなく、自分たちの生活する地域から大槌町の魅力を発信する
場　所	横浜キャンパス　ボランティアセンター内
活動内容	Shake handのデコ鮭作成体験、デコ鮭の物販 「Do for Smaile@東日本」プロジェクト活動パネル展示
活動日時、参加人数	2019年5月25日（土）12：30-19：00 7名

◇スタディーツアー

目　的	・【新入生】震災当時の状況から現在の経緯を知り、震災の前後で変わったことや、変わらずに続いていることなど、自らの目で見て学ぶ ・【上級生】活動に対する地域のニーズの変化を発見し、互いの知識や経験の差を埋め、今後のセクションの活動につなげる
場　所	岩手県大槌町吉里吉里地区
活動内容	スマイル花壇手入れ/町歩き　等
活動日時、参加人数	2019年6月29日（土）30日（日） 14名

◇サマースクール

目　的	子ども達にとって楽しい夏の思い出がつくれるよう、楽しく活動する
場　所	岩手県大槌町立吉里吉里学園小学部
活動内容	コラボ・スクールのサポート、わんぱく広場の実施、海、プールでの活動
活動日時、参加人数	2019年8月1日（木）～6日（火）（※メンバーが入れ替わりながら、終日活動） 13名

◇ふるさと科

目　的	子どもたちとともに自分たちも一緒に吉里吉里の文化を学び、その学びが世代を越える架け橋となる
場　所	岩手県大槌町立吉里吉里学園小学部
活動内容	吉里吉里カルタを使用し、吉里吉里の方言や文化に触れる
活動日時、参加人数	2019年8月26日（月）～8月29日（木）（※26日は準備日） 5名

◇吉里吉里大運動会

目　的	地域の運動会に参加し、様々な年代の地域の方と密に交流する
場　所	岩手県大槌町立吉里吉里学園小学部
活動内容	運動会前日準備、当日のお手伝いおよび競技、懇親会の参加
活動日時、参加人数	2019年10月5日（土）11:00-15:00(前日打ち合わせ等）10月6日（日）5:00-16:00 3名

吉里吉里学園小学部で開催された運動会に進行スタッフとして参加。小学校の運動会は吉里吉里地区の春の地域イベントとしても定着している。

秋の地域イベントの一つである「吉里吉里大運動会」。悪天候のため小学部体育館で実施した。

吉里吉里公民館脇に作られた「スマイル花壇」に設置する明学ロゴマーク入り看板を作成中。

震災で亡くなられたり行方不明となった方とを繋ぐ「風の電話」。今でも多くの方が訪ねています。

吉里吉里学園小学部の「サマースクール」では、震災後初めて北隣の山田町の海水浴場を訪れました。

スマイル花壇の整地作業を終えて、吉里吉里のキーパーソンとともに記念撮影。

吉里吉里地区の漁師を訪問し、わかめの芯裂き作業を体験。

サマースクールでは事前に先生方と打ち合わせをして役割分担。

8.2　陸前高田復興支援プログラム

学生チーフ総括

私たちのセクションは今年は約20名で活動した。今年は今までの体制と異なり、試行錯誤しながら進めた一年であったが、多くの方々に支えられて活動することができたと思う。定期的に行うミーティングではメンバー達と目標、目的を共有して私たちができることを見つけ、これからどのように続けていくのかを考える一年となった。
今年はスタディツアーから始まった。東日本大震災から8年の月日が経った2019年に活動することに対し、新しく入ったメンバーが陸前高田市で東日本大震災を学ぶ機会となった。
次にNPO法人きらりんきっずのイベントに昨年に続いて参加させていただいた。遊びに来てくれた子ども達にとって思い出の一日となるように、きらりんきっずの皆様やボランティアの方々と協力し準備を行った。
また、陸前高田市のうごく・けんか七夕祭りに今年も参加した。準備から参加し、伝統を学ぶことで地域の魅力や特徴を知ることができたと思う。祭りに参加することで新たな出会いがあり、様々な方と意見を交換できる機会となった。
上記をはじめ参加した活動から学んだことは多く、次の代につなげていきたいと思う。活動が続けられていることは陸前高田市の方々の支えが大きい。感謝を忘れず、メンバー自身の思いも大切に、私たちだからこそできる活動を常に考えてこれからも進めていきたいと思う。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科3年）

この1年の陸前高田セクションの活動は、いまの陸前高田に私たちは何ができるのか、何をするべきなのか、ひたすら考え、迷いながらのものだったと振り返る。今年度は、前年度まで参加、企画の面で関わらせていただき、現地での活動の柱の一つになっていた「たかた子どもキャンパス」が実施されないということから、私たち自身の企画力、行動力がより必要とされる状況であった。
スタディツアー、戸塚まつり、きらりんきっず、けんか・うごくまつり、白金祭など以前から実施、参加させていただいている企画に加え、日々のミーティングではセクションとしての新たな活動案について話し合い、時には企画書に起こし、ボランティアセンターの職員の皆様からはたくさんのアドバイスや指導をいただきながら模索してきた。スタディツアーで強く感じた「何かやらなきゃ」という気持ちをどうにか活動にしたい、写真展をやりたいなど、それぞれの「高田のために何かしたい」という想いは強かった。しかしそれらは焦りも伴い、セクションとしての活動を企画するうえで重要な目的や計画性、どのように陸前高田に貢献できるのか、という点が後回しになってしまうこともあったことなどから新たな企画の実施に至ることはできなかった。
今年度をもってセクション制度は廃止されるということだが、このセクションを通してつながったメンバーで、大好きな陸前高田をより盛り上げていく一助となれるよう今後も考え続けていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会学科3年）

●2019年度「陸前高田復興支援プログラム」の主な活動

日にち（移動日含む）	内容（参加人数）
5/25（土）、5/26（日）	戸塚まつり（ひっつみ汁販売）（5/25（土）8名、5/26（日）9名）
7/5　（金）～7/8　（月）	スタディツアー（6名）
7/5　（金）～7/7　（日）	きらりんきっず「夕涼み会」に参加（3名）
8/5　（月）～8/9　（金）	・「けんか七夕」に参加（3名） ・「うごく七夕」に参加（4名）
10/4（金）～10/7（月）	きらりんきっず「きらりんファミリーフェス」に参加（4名）

◇スタディーツアー

目的	現地の方から話を聞き、震災当時の様子を知り、学ぶ 現地の様子を実際に見て、私たちに今求められている復興の形を考える
場所	岩手県陸前高田市、宮城県気仙沼市
活動内容	語り部さんからお話を聞く/見学
活動日時、 参加人数	2019年7月6日（土）～7月7日（日） 6名

◇きらりんきっず「夕涼み会」

目　的	親子向けイベントのお手伝い等
場　所	ほんまるの家(夕涼み会会場)、普門寺(見学)、市民の森(見学)（陸前高田市）
活動内容	夕涼み会での子どもたちと交流/見学
活動日時、 参加人数	2019年7月6日（土）9:00-15:00 3名

◇けんか七夕、うごく七夕

目　的	・古き良き伝統文化に触れることで、現地の人々がお祭りにかける思いを知る ・お祭りに参加することで地域の活性化に貢献する ・ボランティア学生として祭りを盛り上げる ・積極的に地域の方々とコミュニケーションをとり復興への思いを感じる
場　所	岩手県陸前高田市気仙町、岩手県陸前高田市高田町中心部
活動内容	お祭りの準備のお手伝い、参加、片付けのお手伝い
活動日時、 参加人数	2019年8月6日（火）11:30-16:30 7日（水）8:00-20:00 8日（木） 「けんか七夕」 3名、「うごく七夕」4名

◇きらりんきっず「きらりんファミリーフェス」

目　的	・参加者にイベントを楽しんでもらえるよう、最善を尽くす ・多くの人々と関わり、人々のつながりの大切さを感じる
場　所	岩手県陸前高田市
活動内容	・親子フェス準備のお手伝い、参加、片付けのお手伝い/市内見学
活動日時、 参加人数	2019年10月5日（土）13:30-15:00(※前日準備)　6日（日）10:00-15:30 3名

スタディツアーで2019年9月に整備・公開された高田松原津波復興祈念公園を訪問。

「きらりんファミリーフェス」

9　明学レッドクロス（日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップ）

学生チーフ総括

今年度の明学レッドクロスは、献血呼びかけと日本赤十字社本社見学の２つの活動を行った。まず、献血呼びかけだが、秋学期に明治学院大学白金キャンパスにて、献血車が来た際に行った。春にも献血車が来る機会があったが、メンバー間の予定が合わなかったため、秋のみの活動となった。ティッシュを配りながら献血を呼びかけたが、昼休みに行ったため次の時限に授業がある学生が多く、献血をしてくれる人は少なかった。献血にはある程度時間がかかるため、その場で決めて行うのは難しいと考える人が多いように感じた。これを受けて、学内での献血にこだわるのではなく、学外での献血も積極的に紹介したらどうかという指摘などがあった。

次の活動だが、１月下旬に東京都港区芝大門の日本赤十字社本社見学を行った。活動目的は、赤十字の歴史・活動をもっとよく知ろうというものである。この本社見学は本来夏休みに行う予定であったが、台風のため延期となり１月に実施した。見学内容は赤十字の活動や歴史などについて、当時の貴重な資料とともに赤十字奉仕団の方に説明していただいた。そのなかで、本社の建物の由来や、銅像の意味、赤十字名誉総裁である皇后陛下のみ入ることができるお部屋など、活動のみならず様々な説明をしていただいた。さらに本社の地下にある救護倉庫を見せていただき赤十字の災害への対応力の高さを感じた。赤十字の基盤にはたくさんに人の力や活動の積み重ねがあると感じ、有意義な活動となった。

今年度は活動日数が少なかったことが課題だと感じた。昨年度に行っていた、RCV（赤十字ボランティア情報誌）編集委員を明学レッドクロスから選出することや図書館展示などの活動が行えなかったので来年度はそれらの活動を再開していけたらと思う。

（学生メンバー　心理学部心理学科3年）

●2019年度「明学レッドクロス」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/26（金）	学内献血会＠白金キャンパス　献血呼びかけ活動（職員2名）
6/15（土）	日本赤十字社神奈川県支部にて「救急法基礎講習」受講（1 Day for Others協働プログラム）（学生7名（内、セクションメンバー1名）
11/15（金）	学内献血会＠白金キャンパス　献血呼びかけ活動（学生2名、職員3名）
1/31（金）	日本赤十字社本社見学（3名）

◇学内献血会<春>

目　的	学内で実施される献血において、本学学生および教職員の協力を促進するため
場　所	明治学院大学白金校舎
活動内容	献血呼びかけ活動
活動日時、参加人数	4/26（金）12：30-13：15 職員2名

◇学内献血会<秋>

目　的	学内で実施される献血において、本学学生および教職員の協力を促進するため
場　所	明治学院大学白金校舎
活動内容	献血呼びかけ活動
活動日時、参加人数	11/15（金）12：30-13：15 学生2名、職員3名

◇日本赤十字社本社見学

目　的	子どもの貧困へ理解を深め、子どもたちへ学習支援を行う
場　所	日本赤十字社本社
活動内容	日本赤十字社本社見学の見学
活動日時、参加人数	1/31（金）10：00-11：30 学生3名

パレットゾーンでの献血

献血協力の呼びかけ

10　地域活動（キャンパス周辺地域での活動）

10.1　横浜地域活動

●2019年度「横浜地域活動」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/20（土）	「とっとの芽」（プチ 1Day）（9名(内、セクションメンバー2名))
5/18（土）	「とっとの芽」（プチ 1Day）（6名(内、セクションメンバー1名))
5/25（土）・5/26（日）	大学祭「戸塚まつり」で子ども向けお祭りブースを企画・実施（5/25：11名、5/26：14名）
6/2（土）	戸塚区原宿商店街・松栄会「ふれあいフリーマーケット」で子ども向けブースを企画・実施（1 Day for Others協働プログラム）（26名(内、セクションメンバー17名))
6/15（土）	「とっとの芽」(1 Day for Others協働プログラム)（8名）
6/22（土）	「寿町スタディーツアー」で地域の社会課題を知る（9名、職員3名）
7/ 6（土）	「とっとの芽」（プチ 1Day）（3名(内、セクションメンバー2名))
7/20（土）	「小田急分譲地自治会夏祭り」にボランティア参加（7名、職員1名）
8/ 9（金）	「とっとの芽」（プチ 1Day）（3名(内、セクションメンバー2名))
8/25（日）	戸塚区制80周年記念事業「夏休みこどもフェスタ」（10名）
9/ 7（土）	「とっとの芽」（プチ 1Day）（6名(内、セクションメンバー3名))
10/27（日）	「戸塚宿場まつり」で子ども向けブースを企画・実施（19名）
11/ 9（土）	倉田小学校地域防災拠点　防災訓練（3名）
12/21（土）	「とっとの芽」（プチ 1Day）（3名）

◇とっとの芽（戸塚区地域子育て支援拠点）

目　的	・戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」で子どもたちと触れ合う ・明治学院大学学生に「とっとの芽」の活動について知ってもらう
場　所	戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」
活動内容	子どもたちや保護者の方々との触れ合い
活動日時、参加人数	1.2019年4月20日（土）9:00～12:00、9名(内、セクションメンバー2名)（プチ1Day) 2. 5月18日（土）9:00～12:00、6名(内、セクションメンバー1名)（プチ1Day) 3. 6月15日（土）9:00～16:00、8名（1 Day for Others協働プログラム) 4. 7月 6日（土）9:00～12:00、3名(内、セクションメンバー2名)（プチ1Day) 5. 8月 9日（金）9:00～12:00、3名(内、セクションメンバー2名)（プチ1Day) 6. 9月 7日（土）9:00～12:00、6名(内、セクションメンバー3名)（プチ1Day) 7.12月21日（土）9:00～12:00、3名（プチ1Day)

◇戸塚まつり

目　的	地域の方々との交流
場　所	横浜キャンパス　ボランティアセンター前
活動内容	子ども向けお祭りブースを実施
活動日時、参加人数	2019年5月25日（土）10:00～18:00、11名 5月26日（日）9:30～16:00、14名

とっとの芽

小田急分譲地自治会夏祭り

◇ふれあいフリーマーケット

目　的	フリーマーケットに参加した親子に楽しんでもらう
場　所	戸塚区原宿
活動内容	戸塚原宿商店街が主催するフリーマーケットで子ども向けの遊戯ブースを運営
活動日時、 参加人数	2019年6月2日（日）9:00～15:00（1 Day for Others協働プログラム） 26名（内、セクションメンバー17名）

◇寿町スタディーツアー

目　的	地域の社会課題を知る
場　所	中区寿町
活動内容	「寄せ場」として有名な寿町を歩き、支援団体や施設の方から現況や支援のあり方などを学ぶ
活動日時、 参加人数	2019年6月22日（土）11:00～17:30 9名

◇小田急分譲地自治会夏祭り

目　的	地域活性化
場　所	戸塚区上倉田町
活動内容	夏祭りに参加し、盆踊りを地域の方と踊る
活動日時、 参加人数	7月20日（土）19:00～ 7名、職員1名

◇戸塚区制80周年記念事業「夏休みこどもフェスタ」

目　的	地域の方々との交流
場　所	戸塚区役所
活動内容	会場受付、来場者の案内等
活動日時、 参加人数	2019年8月25日（日）10:00～15:00 10名

◇戸塚宿場まつり

目　的	戸塚宿を地域の人に広める
場　所	戸塚駅周辺、戸塚区役所
活動内容	子ども向けブースの運営
活動日時、 参加人数	2019年10月27日（日）8:30～15:30 19名

ふれあいフリーマーケット

夏休みこどもフェスタ

10.2　白金地域活動

学生チーフ総括

2019年度、白金地域活動には、新1年生の加入はなかった。しかし、白金キャンパスで活動をしている上で、アクセスの問題などで、仕方のないことだと思っている。一方で新しく3年生が入ってくれたこともあり、意気揚々と活動できたと思う。今年の活動としては大きく3つの活動を行った。1つは白金小学校で行う地域の運動会の運営である。5月に行われたその運動会では昨年の反省を活かしうまく仕事の振り分けやローテーションができたと感じている。直前に備品の欠落があったなどハプニングもあったが、臨機応変な行動によって解決に導くことができた。2つ目にどんぐり公園で行われたお祭りへのブース出店である。学生自身が考えたブースを出店し、ブースに来場し、ゲームに参加した子どもに対して、景品として学生が練習し、技術を身につけたバルーンアートを配った。今年のブースは2つ、去年と同じ魚釣りのブースと新しく輪投げのブースを出店した。輪投げブースの制作は夏休みの期間を利用し、一生懸命に作った。しかし当日活動に参加した学生が想定より少なく、来場者が混み合った際に、2つ同時にブースを開くことが出来なくなってしまったことが反省点として挙げられる。やはり活動するには人数が必要だと、改めて感じることができた。3つ目はマップ作りである。企画書はチーフの私が書いていたのだが、思ったように進まず、企画書が出来た頃には半年は経っていた。完成まで時間を要してしまったことが課題として挙げられるが、無事に完成させることができた。今回のグルメマップ(47ページ以降参照)は以下のとおりである。メンバー全員の努力が詰まっているマップである。是非ご覧頂きたい。

(学生メンバー　文学部フランス文学科3年)

●2019年度「白金地域活動」の主な活動

日にち	内容(参加人数)
5/18（土）	白金小学校での地域運動会「ふれあい運動会」（14名、職員1名）
10/19（土）	白金台児童館主催「ワンパクまつり」で子ども向けブースを企画・実施（8名、職員1名）
通年	白金キャンパス周辺地域を紹介したマップ「てくてくまっぷ」を作成

【参考】2019年度白金キャンパス近隣地域での活動(公募プログラム)

日にち	内容(参加人数)
8/17（土）～8/19（月）	港区高松地区青少年委員会主催「みなとキャンプ村」（2名）
12/1（日）	「MINATOシティハーフマラソン2019」（20名）

◇ふれあい運動会

目　的	地域の方々との交流
場　所	港区立白金小学校　グラウンド
活動内容	地域主催のふれあい運動会に参加し、各種手伝い、交流を図る
活動日時、参加人数	2019年5月18日（土）8:30～15:00 14名、職員1名

◇ワンパクまつり

目　的	白金台児童館を中心とする地域のお祭りにおいて、ブース出展することで地域連携を強化
場　所	白金台どんぐり児童遊園
活動内容	子ども向けブースの出展
活動日時、参加人数	2019年10月19日（土）9:30～16:30 8名、職員1名

ふれあい運動会

ワンパクまつり

◇学校周辺マップ「てくてくまっぷ」の作成

目的	大学周辺地域を知り、その情報をマップにして白金キャンパスに通う学生に伝える
場所	白金キャンパス周辺（港区周辺）
活動内容	白金地域の探索/飲食店の取材/マップのデザイン

品川をぶらぶら。
高輪台駅そばのお弁当屋さん。
500 円、400 円の日替わり弁当はおかずの品数も多くて美味しいです。
若女将は、明学の卒業生です。
大学から
歩いて
約 8 分
秋田土産とお食事処。
稲庭うどん、きりたんぽ、はたはた、比内地鶏、いぶりがっこ、日本酒・・。
ここにくれば、いつでも秋田を堪能できます。
大学から
歩いて
約 15 分
あきた美彩館
Ⅰ. 高輪のお弁当　みずしま
Ⅱ. あきた美彩館
p 2

大学から
歩いて
約 15 分
世界の子どもたちの暮らしや
ユニセフの活動を紹介しています。
Ⅲ. ユニセフハウス
Ⅰ. 高輪のお弁当　みずしま
港区高輪 3-10-36
℡：03-3440-2241
営業時間：（月～金）11：00～14：00　17：30～23：00（L.O. 22:30）
（土）17：30～23：00（L.o. 22:30）
定休日：日曜日
＜都営浅草線　高輪台駅降りてすぐ＞
Ⅱ. あきた美彩館
港区高輪 4-10-8　ウィング高輪 WEST-Ⅲ　1 階
℡：03-5447-1010
営業時間：（ランチタイム）11：00～15：00（L.O. 14:30）
（ディナータイム）17：00～23：00(L.O. 食事 22：00　飲み物 22：30)
定休日：年中無休（元旦休み）
＜品川駅高輪口より徒歩 3 分＞
Ⅲ. ユニセフハウス
港区高輪 4-6-12
℡：03-5789-2011
開館：月～金　第 2、4 土曜日　10：00～17：00
＜品川駅高輪口より徒歩 7 分＞
p 3

白金高輪をぶらぶら。
大学から
歩いて
約 9 分
Ⅳ. しろかね　PanPan 堂
アットホームなかわいい街のパン屋さん。
どのパンもとっても美味しくて、何度も食べたくなるパンです。
中でも、くるみパンとクリームパンにはまってしまいました。
大学から
歩いて
約 5 分
ご夫婦で作っているサンドイッチのお店。
とてもリーズナブルで種類が豊富に揃っています。
揚げ物系が学生に人気です。
Ⅴ. サンパール　高輪店
p 4

沖縄にいるかのように
沖縄料理が堪能できるお店。
中でも、沖縄そばがとても美味しくておススメです。
大学から
歩いて
約 9 分
Ⅵ. 沖縄バル　花 naha
Ⅳ. しろかね　PanPan 堂
港区白金 1-28-3 多田ビル 1 階
℡：03-3440-6701
営業時間：10:00～14:00 15:30～20:00　※14:00～15:30 は仕込みのため休み
定休日：土曜日・日曜日・祝日（不定休あり）
＜東京メトロ南北線・三田線　白金高輪駅の 3 番出口より徒歩 1 分＞
Ⅴ. サンパール　高輪店
港区高輪 1-27-22
℡：03-3441-8368
営業時間：7：00～19：00
定休日：日曜日・祝日
＜都営浅草線　高輪台駅より徒歩 6 分＞
Ⅵ. 沖縄バル　花 naha
港区高輪 1-4-21 1 階
℡：03-3445-9278
営業時間：11：30～14：00　17：30～24：00
定休日：土曜日
＜東京メトロ南北線・三田線　白金高輪駅の 2 番出口より徒歩 2 分＞
p 5

麻布十番をぶらぶら。

明学から歩いて行ける天然温泉。
熟めとぬるめの浴槽にわかれ、水風呂にも温泉水を使用しています。
また、東京の温泉らしく黒湯を加熱しています。
一般の銭湯のため、タオルや石けん等は
持参してください。
利用料は４７０円になります。

大学から
歩いて
約21分

Ⅶ. 麻布黒美水温泉　竹の湯

Ⅶ. 麻布黒美水温泉　竹の湯
港区南麻布 1-15-12
℡：03-3453-1446
営業時間：15:30～23:30
定休日：月曜日・金曜日
＜東京メトロ南北線　麻布十番駅の 1 番出口より徒歩 5 分＞
＜都営大江戸線　麻布十番駅の 7 番出口より徒歩 5 分＞

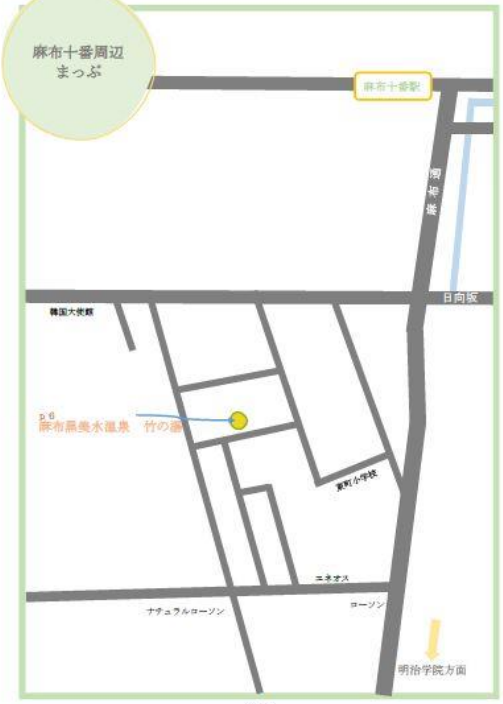
～ memo

p6

品川と白金高輪
周辺まっぷ

p 7

麻布十番周辺
まっぷ



p8

～ memo

～ memo

ボランティア団体「白金地域活動」って？

『地域・子どもを対象にボランティア活動を行っている学生団体』

白金キャンパス周辺の地域の活性化を目的として活動をしています。そのため、地域の幅広い世代の方々と関わることができます。

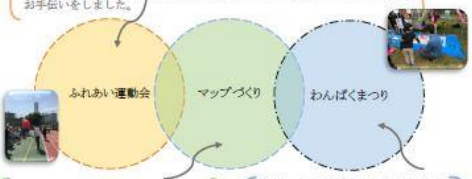
白金キャンパスに通っている皆さん、一緒に活動してみませんか？

ミーティングは週に１回お昼休み、ボランティアセンターにて実施！

詳しくは表紙にある連絡先にお気軽にお問い合わせください。

＜活動内容は？＞　2019年度はこんな活動をしました。

白金キャンパス近くの白金小学校で行われる地域の運動会であり、地域に暮らす幅広い世代の方々が参加されます。そこで、アナウンスや用具準備等のお手伝いをしました。



多くの学生が学校周辺をあまり知らないということから、学生たちに地域のことを少しでも知ってほしいという想いを込めてはじめた活動です。大学を中心にし、様々な方面に行き教業し学生向けに冊子を制作しました。

白金キャンパス近くのどんぐり公園で行われる地域の子ども向けのお祭りであり、輪投げと魚釣りブースを本団体からは出店しました。また、景品としてバルーンアートを作りました。
（主催・白金台児童館）

＜活動してみてどう？＞

・実際に活動に参加することによって、地域の幅広い方々と関わる機会が多くあったため勉強になることが多くありました。
・準備することが多くあり大変だったけれども、その分達成感がありました。

11　海外プログラム事業部（国際協力、国際支援）

学生チーフ総括

海外プログラム事業部は「社会問題に関心がある」「ボランティアがやりたい」けれど、「まず何から始めればいいのか分からない」そんな学生がセクションとして活動する中で、それぞれが本当にやりたいボランティアを模索する導入のような存在である。今年度は学生ボランティアとして強い思いを持った71人が集まるセクションへと成長した。そして、一人ひとりが主体的にアクションを起こす学生ボランティアであり、この団体がボランティアの出発点として、大学の中にとどまることなく活動していってほしい、そんな思いでチーフとして活動してきた。実際に、このセクションをきっかけに大学内外で様々な活動に挑戦する学生が増えている。

この1年間を通して、ボランティアセンターを拠点に一人ひとりの行動が誰かのボランティアの小さな一歩を担っていたことは間違いない。そして多岐にわたる企画をしてきたが「普段から「自分事」として社会問題を捉え、アクションを起こす明学生が増えてほしい」この思いを活動の軸として活動してきた。セクションとして「私たちにとってボランティアとは何か」これを常に問い続け、一緒に悩み、時には意見がぶつかり合うこともあった。しかし私たちのセクションでは大学を活動の拠点に、実践しながら常にこの問いを持ち続けることがボランティアの本質やその継続性に繋がることであると確信している。この対話は私たちが今後、新たな機会や選択肢を目の前にした時の大切な軸の一つとして確実に存在しているからである。

私たちがこの1年間展開してきた様々な企画の活動だけに着目するのではなく、どのような「思い」で、そして何故ボランティアをするのか、それ自体を顧みることも学生ボランティアとしての価値があることであると考える。それに気づくことができたのは言うまでもなく、「ボランティアやってみたいけど、何から始めればいいのか分からない」とボランティアセンターに訪れたことから始まっているのである。これからもボランティアセンターが全ての明学生にとって、ボランティアの入り口であり、学生ボランティアの新たな出発を後押しする存在であり続けることを強く願っている。

（学生メンバー　文学部英文学科2年）

学生サブチーフ総括/ Table For Twoリーダー

海外プログラム事業部の活動は未来に繋がる学びの場である。海外プログラム事業部は、「貧困」「ジェンダー」「食料」の三つの柱を元に自分たちのやりたい企画をやってきた。メンバーはその柱の中のいずれかに興味はあるが、それぞれの興味のある分野は異なっている。私達の活動の中で、ボランティア実践と共に「気にトピ」という学びの時間を取っていた。その学びの内容には各人の興味が反映される。そのため、自分の興味のある分野以外の学びを得る事ができる。そうして、学ぶことによって新たな観点を得て、興味の幅が広がる経験をした。このようにして広がった興味に関して新たな企画を考え、実践に移すことができる。ただ学ぶだけではなく、実践を通して学びを更に深いものにした。

また、メンバーの多くはそうして興味を得た内容に関する活動を学内外で行っている。その活動は多岐にわたっている。外での学びが海外での活動にも良い意味で繋がったし、逆に海外で活動しているからこそより深い学びや実践に繋がるような学外での活動もあった。ボランティアセンターの1セクションとして存在していた意義として「ボランティアしてみたいけど何をすればいいのかわからない」という学生が自分の本当にやりたいことを見つけられる場であるということが挙げられる。私達の活動を通して、様々な事を学び、学生生活やこれからの人生を通して自分が何をしたいのか見つめ、行動を起こすことができる。そのような学びと実践に繋がる場であった。

（学生メンバー　心理学部心理学科2年）

●2019年度「海外プログラム事業部」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
5/25(土)・5/26(日)	大学祭「戸塚まつり」で子ども向けペットボトルキャップ回収キャンペーンを実施（5/25：9名、5/26：10名）
6/20(木)　・21（金)	世界難民の日イベント（2日間で約50名）
10/23(水)～10/29(火)	ペットボトルキャップ回収キャンペーン「Cap for Treat」（6名）
10/23(水)	横浜市男女協同参画推進協会共催イベント「ジェンダーとメディア表現」第1回（52名）
11/5(火)～8(金)	Girls Project(13名)
11/11(月)	横浜市男女協同参画推進協会共催イベント「ジェンダーとメディア表現」第2回（23名）
11/18(月)～11/30（土)	Table For Two(18名)

◇ペットボトルキャップ回収

目　的	・ボランティアが気軽に楽しみながら身近にできることを実感してもらい、興味・関心を持ってもらう ・イベントを通して普段よりさらに多くのペットボトルキャップを回収しワクチンに換え、世界の子どもたちの健康に貢献する
場　所	横浜キャンパス　ボランティアセンター付近
活動内容	・海外プログラム事業部のメンバーが回収箱を持ち、ボランティアセンター前でキャッップ回収を行う ・集めたキャップを進栄化成（株）に送りリサイクルしてもらい、換金額を認定NPO法人世界の子どもにワクチンを 日本委員会（JCV）に送る
活動日時、参加人数	2019年5月25日（土）11:00～18:00　9名、26日（日）10:00～17:00　10名 10月23日(水）、24日（木）、25日（金）、29日（火）　昼休み　各6名

実施概要

海外プログラム事業部ではペットボトルのキャップ回収をおこなった。この活動は2019年度以前から先輩方が継続している企画で、海外セクションとしてもボランティア活動の第一歩として大切にしている取り組みである。横浜キャンパスにはペッタくん、白金キャンパスには、ふたまるくんと名付けられたボックスを設置し、定期的に回収をおこなった。回収・集計後、キャップは世界の子どもにワクチンを日本委員会（JCV）に送り、世界中の子どもたちのワクチンになっている。

上記の常時回収に加えて、5月に行われた戸塚まつりでも回収活動を実施した。地域の方々がこの戸塚まつりのためにキャップを貯めてくださったり、たまたま訪れた家族連れが回収活動について知ってくださったりと、ボランティアの輪の広がりを肌で感じることができた機会となった。

また、10月にはハロウィンに関連付けて、海外メンバーが仮装をしながらキャップ回収をする企画を行い、学内に向けて活動の認知度向上を図った。

この企画は実際に現地に赴くようなボランティアとは違い、一見地味な活動である。しかし、回収できたキャップの数から、届けられるワクチンの個数を自分たちの手で集計する作業は、ボランティアに対する実感を生み、メンバー内でもボランティアを身近に感じることができたという声が挙がった。このように、キャップ回収を通して距離感の近いボランティアを行うことができたことは、学生にとって非常に意義のある経験となっただろう。

（学生メンバー　社会学部社会学科2年）

◇世界難民の日イベント

目　的	本学学生が難民問題への関心を高め、自主的な難民問題への働きかけるきっかけをつくる。
場　所	横浜キャンパス　ボランティアセンター、クラララウンジ
活動内容	・6月20日(木）：　トークイベント「日本にいる難民」 ゲスト　長谷部美佳先生(明治学院大学 教養教育センター 准教授) ・6月21日(金）：学生ワークショップ 「IF I WERE A REFUGEE…」 ・6月20日、21日両日開催 ：写真展　(難民に関するパネル展示)
活動日時、参加人数	6月20日(木)12:35-13:15　6月21日(金)12:35-13:15 (2日間で約50名)

実施概要

6月20、21日の2日間にわたり「世界難民の日」の企画を行った。本企画は、日本国内では関心が薄い難民問題だが、実際国内では難民は多数存在し、本学にも在籍している。この企画の実施で本学学生が難民問題への関心を高め、自主的な難民問題への働きかけるきっかけとして提案されたものである。

内容として「IF YOU WERE REFUGES…」と題したワークショップを開催、各日ターゲット、テーマを設定し、少人数のグループを編成することで考えを深め合う形式を取った。1日目は難民への関心を持っている本学学生向けに長谷部美佳先生をお招きし、「世界の・日本の難民情勢」に関してのレクチャーをして頂いた。2日目はボランティアサークルに所属している学生向けに、今ワークショップのテーマに沿った「自分が難民だったとして、難民キャンプへの持ち物を優先付ける」アイスブレイクを実施、発表を行った。

私がこの企画に参加して「ボランティアという言葉の多義性」を実感した。「ボランティア」というワードに私はずっと、募金や物資支援、現地への渡航など対象への直接的な支援だけをイメージに持っていた。しかし今回の企画に携わり、直接的支援だけでなく、他者へ問題意識を訴えかけること、助けを必要としている人の存在を知ってもらうこと、つまり「対象を認知し、自分が何を思い、行動するか」というイメージを私の中で構築することができた。ボランティアへの向き合い方は多様であり、多様であるからこそもっと気軽に取り組まれていくものだと、様々なセクションが存在する海外ボランティア事業部の強みがここにあることを感じさせてくれた企画だった。

（学生メンバー　社会学部社会学科1年）

◇Girls Project

目　的	世界で起きている女性の性差別を学生に知ってもらい、学生自ら主体的に動くきっかけづくりをする。
場　所	横浜キャンパス　クララ・ラウンジ ほか
活動内容	啓発のため、ピンク色の綿菓子の配布。動画上映、プラン・インターナショナル・ジャパンへの募金箱の設置。また、横浜市男女共同参画推進協会共催イベント「ジェンダーとメディア表現」を2回にわたって開催をした。
活動日時、参加人数	11月5日(火)、6日(水)、7日（木）、8日(金) 4日間で13名 横浜市男女協同参画推進協会共催イベント「ジェンダーとメディア表現」 10月23日(火)15:30-17:00、52名 11月11日(月)15:30-17:00、23名

実施概要

「ガールズ・プロジェクト」とは、毎年『海外プログラム事業部』が10月8日～12日の「明学国際ガールズウィーク」に行う、世界中の女性へと支援をつなげるボランティア活動である。しかし2019年は、期間を10月8日～11月11日へと大きく伸ばした。これにより、自分達の支援の幅を広め、より専門的に行うことができた。その為、今年はこのプロジェクトの中から更に３つにチームを分けた。

１、ガールズウィークについて気づいてもらう為、校内の色取りをする「装飾班」
２、性格差が身近に起こっていること学んでもらう為、それを伝える「ピンク班」
３、その学びを、より専門的にプロフェッショナルの方々から教わり、未来へとつなぐ「フォーラム班」

装飾班は、明治学院大学（横浜キャンパス）の校内とSNS（Instagram, Twitter）に、ガールズ・プロジェクトのポスターを貼り、我々の活動を宣伝した。その後、ポスターを見てプロジェクトに興味を持ち、活動に参加をしてくれた学生が多数いた。特に、SNSでの広報により、他大学からも参加者を多く集めることが出来た。

ピンク班は、2019年11月5日（火）から11月8日（金）の4日間を明学ガールズ・ウィークと表し、ピンク色の綿菓子の無料配布、男性・女性のジェンダー観に関する意識調査、男女混合での女性権利に対するディスカッション、 ジェンダーに関する幅広いトピックを扱った動画の上映を明治学院大学（横浜キャンパス）クララ・ラウンジで行った。このプログラムでの映像、ディスカッションを通じて明学生に世界中で起きているジェンダーによる不平等や暴力を改めて見つめ直すことでより良い社会を目指すためのきっかけ作りを行った。

フォーラム班は、2019年10月23日（水）・11月11日（月）の2日間、「横浜市男女共同参画推進協会」の方々との協力で、ジェンダー表現に関する意識を高め、学びの場を学生に設けるための企画「ジェンダーとメディア表現」を実施した。10月は津田大介さん、津田環さん、ハヤカワ五味さんを呼び、講演会形式。11月は清田隆之さん、治部れんげさんを呼び、ワークショップ形式で実施した。普段何気なく見ているCMや広告の表現、作られた背景を、講師の方々のジェンダー観を基にして、学生参加者と共に考えた。より一層柔軟な目で物事を、また人の心を読み解く力を、これから社会へと飛び立つ学生へとつなげることが出来た。

今回の「ガールズ・プロジェクト」は昨年とは異なり、男性の協力を以前より取り入れる活動にした。そんな中、我々が気づいたことがある。男女差別の問題には、女性・男性のお互いの意見の交換が必要不可欠ということだ。本プロジェクトを行ったことで、女子・男子が共に、ジェンダー意識と性の不平等を自ら考え直す機会を得ることが出来た。また、この問題の改善に必要なのは「男性一人一人のジェンダー意識の改善」と「女性への協力」である。他にも、ジェンダー表現の際に「全ての表現には誰かを傷つけるリスクを持っている」ということを学んだ。準備期間から本番まで、メンバー各々が新たな発見をし、その達成感に大きな価値を感じた。最後に、ジェンダーに対する固定概念を持った大人の社会へと足を踏み入れる我々の世代が、人々を尊重することのできるジェンダー意識を持ち、ステレオタイプな世界を変えていく為にも、この活動をより広く行っていく。

（学生メンバー　文学部英文学科2年）
（学生メンバー　国際学部国際学科2年）
（学生メンバー　文学部英文学科2年）

◇Table For Two

目　的	非営利団体TABLE FOR TWOを通して、ヘルシー定食一食あたり20円を支援先地域に届けるとともに、世界の不均衡問題を学生に周知する。
場　所	横浜キャンパス食堂、白金キャンパス(白金祭)
活動内容	横浜キャンパスでは、学生生協、生協学生委員会と協力し、ヘルシー定食メニュー（ビビンバ丼、チキンムアバ、ガパオライス、ドロワット）を考案し、横浜キャンパス食堂で販売。12日間で1,115食を売上、22,300円を寄付。 白金キャンパスでは、白金祭でパンシットを販売。3日間で420食を売上、8,400円を寄付。
活動日時	(横浜)11月18日(月)、19日(火)、20日（水）、21日(木)、22日（金）、23日(土) 25日(月)、26日(火)、27日(水)、28日(木)、29日(金)、30日(土) (白金)11月1日(金)、2日(土)、3日(日)

◇学生による自主活動

・スタディツアー

私たちにとってのボランティアツアーは実際に海外の国を訪れ、現状を知り、体感することしかできない。これは他の団体に比べるとボランティアと言えないかもしれない。毎年同じ場所に行くわけでもなく、学校を建てるわけでもないからだ。しかし、私たちは毎年違う国や場所に行き、様々な社会問題を知ることによって多角的な視野を持つことができると考えている。
2018年のタイでは山岳民族の社会的地位や貧困問題を学び普段の生活を体験しながら現地の子供たちと交流をした。2019年のフィリピンでは貧困問題を学び実際にゴミ山やスラム街に訪問し、具体的にどのような生活をされているのかを見て聞いて感じた。同じ貧困問題でも原因や状況などは違う。私たちが現地へ赴き体験できる「ボランティア」の、その数日が、いつか数年後や将来の長期的な支援の原点になるのではないかと考えている。それは私自身がタイに行ったことで海外プログラム事業部自体への思いも強くなり、タイの問題に限らず自分に出来るアクションを探すきっかけになったからである。
私たちの団体は、それぞれの情熱や行動力を大事にしている。だからこそ、同じ問題に全員が関心を持つ必要はなくそれぞれがその人なりに活動し続けられるように、同じ原点から始まり一人ひとりが感じたことを様々な手段を通して行動に移していければいいと思う。私たちのボランティアツアーは現地で活動するだけでなくその先の未来に私たち自身がいかにして成長し問題に向き合っていくかを大事にしている。私たちの活動はたった数日の海外ボランティアかもしれない。しかしその数日が私たちにとっては今後の活動やボランティアの大きな原点になる存在であると考えている。

（学生メンバー　国際学部国際学科2年）

・Raise

【事業概要】

Raiseは、自分たちの社会課題に関する情報発信によって、学生を含めた若者全体に、社会課題の解決という価値観の普及を目指す。私たちの提供するコラムを見てもらうことで、その若者の人生の価値観や方向を少しでも変えるような機会を提供し、人生のターニングポイントとなるような情報提供を行う。

団体名の由来でもある、私たちのあるべき姿として①Raise questions…社会問題をターゲットである女子大生に投げかける②Raise our voices …私たちそしてコラムを見た若者の社会問題に対する声を起こす③Raise young people…情報発信から生まれた価値観によって社会の私たちを含めた若者が育つ。以上3つの過程を行動理念とする。

【SNSでの啓蒙活動】

〈目的〉

Instagramで主に情報提供を行う。社会問題の提議だけでなく、解決しようと試みる団体やNPO、企業や行政の活動なども紹介していき、ソーシャルグッドなコラムにしていく。団体設立時当初はステークホルダーの多さや影響力の大きさからCSR事業にフォーカスしていたが、社会課題解決を試みる組織は多様に存在し、様々な方向からのアプローチが社会課題解決には必要であるため、コラムでは社会課題解決を行う団体の種類は問わない。しかし、ある程度ターゲットである女子大生に親和性のあるコラムを提供する。または親和性のある話題や内容からスタートするコラムにしていく。

〈参加人数〉　７名

〈実施概要〉　11月インスタグラムを設立し、コラムを開始した。

〈得た学び〉

自分たち自身が身近な問題から題材を見つけ、新しくメディアを立ち上げるということの楽しさと難しさを知った。まだ試運転の段階でもあるため、より多くの女子大生に届けられるように日々模索しながらメディアを作りたい。

〈今後〉

メンバーをより集めて事業拡大し、イベントなども行なっていきたいと考えている。

（学生メンバー　社会学部社会学科3年）

12　MGパール（環境）

●2019年度「MGパール」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/3（水）	国際ソロプチミスト 東京－弥生「観桜会」に出席・出店（3名）
5/25（土）・5/26（日）	大学祭「戸塚まつり」で出店（5/25：2名、5/26：6名）
6/16（土）	1Day for Others「オランウータンから学ぼう！ボルネオ島の環境問題」（8名）

※毎週1回昼休みに学内で制作活動

◇観桜会

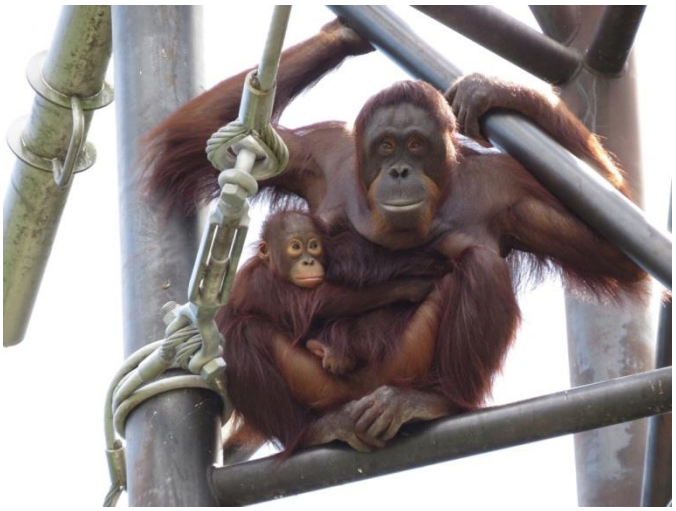
目　的	ボルネオ島の天然パールを使用したアクセサリーの広報と販売
場　所	綱町三井倶楽部
活動内容	ボルネオ島の天然パールを使用したアクセサリーの販売
活動日時 参加人数	2019年4月3日（水）9:00～15:00、3名

◇戸塚まつり

目　的	ボルネオ島の天然パールを使用したアクセサリーの広報と販売
場　所	横浜キャンパス
活動内容	ボルネオ島の天然パールを使用したアクセサリーの販売
活動日時 参加人数	2019年5月25日（土）13:30～18:00、2名 2019年5月26日（日）10:00～16:00、6名

◇オランウータンから学ぼう！ボルネオ島の環境問題

目　的	「1 Day for others」のプログラムとして実施 オランウータンの生態を知る、ボルネオ島の現状を知る
場　所	多摩動物公園　/　パルテノン多摩
活動内容	動物園見学/認定特定非営利活動法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン(BCTJ)の方から話を聞く
活動日時 参加人数	2019年6月16日（土）11:00～15:30 リーダー学生1名、一般学生7名



新入生のボランティア意識とセンターの課題
－「2019年度　新入生ボランティア活動アンケート」を中心に－

ボランティアセンターでは、2001年度から、新入生のボランティアへの意識などを把握するためのアンケートを毎年4月の学科ガイダンス時に実施している。2019年度調査では、2325人から回答を得た。

以下、必要に応じて経年のデータなども利用しながら、新入生のボランティア意識とセンターの課題について述べていく。

1. ボランティア活動に対する関心

「ボランティア活動を通して、学ぶことに興味がありますか」という問いが初めて設定されたのは2014年度になるが、ボランティア活動に対する新入生の関心が高まっている傾向を見てとることができる（表1）。全体に対する「大いに興味がある」と「ある」を合わせた割合は、2014年度の66.1%から2019年度の70.7%に上昇している。明治学院大学に入学してくる学生のおよそ7割が、ボランティア活動に関心を寄せている。

表1　「ボランティア活動を通して、学ぶことに興味がありますか」の経年変化

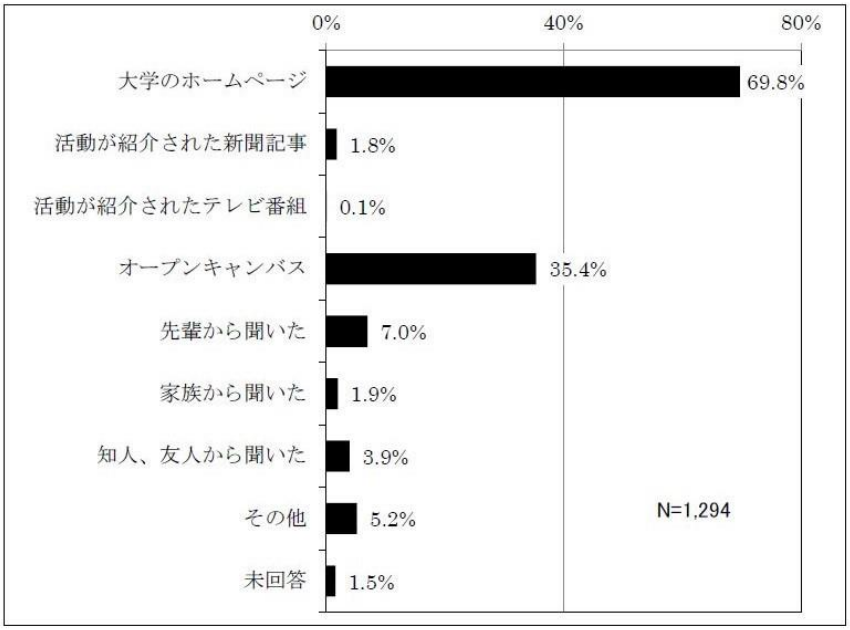
	2014		2015		2016		2017		2018		2019（今年度）	
	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	**回答者数**	**割合（%）**
大いに興味がある	550	18.5	553	19.6	512	17.8	581	20.4	527	19.4	**445**	**19.1**
ある	1,416	47.6	1,297	45.9	1,339	46.7	1,511	53.0	1,320	48.7	**1,198**	**51.5**
どちらともいえない	753	25.3	713	25.2	731	25.5	588	20.6	645	23.8	**548**	**23.6**
あまりない	168	5.6	166	5.9	188	6.6	135	4.7	167	6.2	**103**	**4.4**
全くない	39	1.3	44	1.6	41	1.4	24	0.8	41	1.5	**25**	**1.1**
未回答	49	1.6	53	1.9	59	2.1	10	0.4	11	0.4	**6**	**0.3**
全体	2,975	100.0	2,826	100.0	2,870	100.0	2,849	100.0	2,711	100.0	**2,325**	**100.0**

「大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか」という問いに対しては、79.3%の新入生が「はい」と回答している。「はい」の割合が2008年度には61.2%、2013年度には71.8%、2018年度（昨年度）には75.3%だったのに対し、2019年度はこの10年間でもっとも高い割合（79.3%）を示している。この数値から、ボランティアセンターの役割がますます重要になっていることがわかる。

割合には、学科ごとでばらつきがある。「大いに興味がある」「ある」と回答した割合が高かったのが、国際学科（90.5%）、教育発達（84.0%）、国際キャリア学科（82.1%）、グローバル法（79.6%）だったのに対し、フランス文学科（60.1%）、経営学科（61.8%）、心理学科（63.5%）、消費情報環境法学科（64.6%）、法律学科（64.8%）は割合が比較的低かった。とはいえ、割合が低い学科であっても、新入生の60%以上は「ボランティア活動を通して、学ぶことに興味がある。」

「大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか」に関しても、国際学科（95.7%）、国際キャリア学科（92.9%）、グローバル法学科（89.8%）、教育発達（88.5%）が「はい」の割合が高い。一方、「はい」の割合が比較的低いのが、経済学科（71.1%）、芸術学科（72.4%）、経営学科（73.0%）、フランス文学科（73.5%）であった。学科によって違いはあるものの、どの学科においても7割以上の新入生が大学時代にボランティア活動に参加したいと述べているので、すべての学科にボランティア活動に対する協力を求めるとともに、どの学科であっても参加しやすいボランティア活動内容や支援体制を整える必要がある。

図1　「どのように明治学院大学のボランティア活動を知りましたか」の回答



注1）明治学院大学のボランティア活動を知っていた人が母数（N=1294）。
注2）複数回答可。

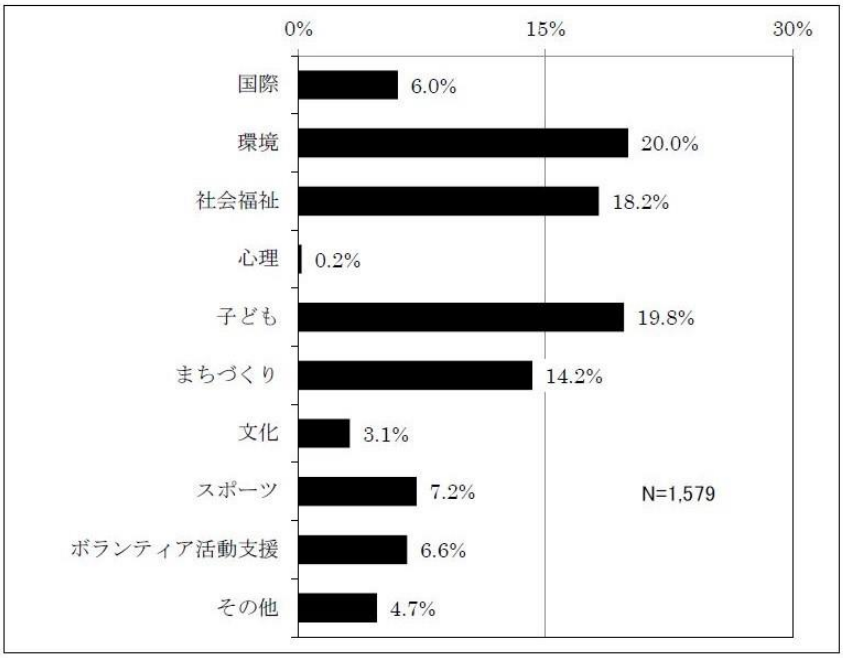
ボランティア活動に対するニーズは高いものの、明治学院大学のボランティア活動が必ずしも周知されているわけではない。「明治学院大学のボランティア活動について知っていましたか」という問いに対して、「はい」と回答したのは、55.7%に留まる。明治学院大学のボランティアをどのように知ったかについては、「大学のホームページ」と「オープンキャンパス」が高い割合を示している（図1）。

大学時代にボランティア活動に参加したい学生の割合の高さから考えて、明治学院大学のボランティア活動についてこれまで以上に発信していくことは、ボランティアセンターだけに留まらず、大学全体の価値を上げることにつながる。また、入学後にも、ボランティア活動をサポートする場所であるボランティアセンターについて知ることができる機会を数多く提供する必要があるのではないか。

2. ボランティア活動の内容

明治学院大学の新入生の半分弱（2019年度で47.9%）は、入学前にボランティア活動に参加したことがある。図2は、その内訳である。環境、子ども、社会福祉、まちづくりといった分野でのボランティア活動が多いことがわかる。

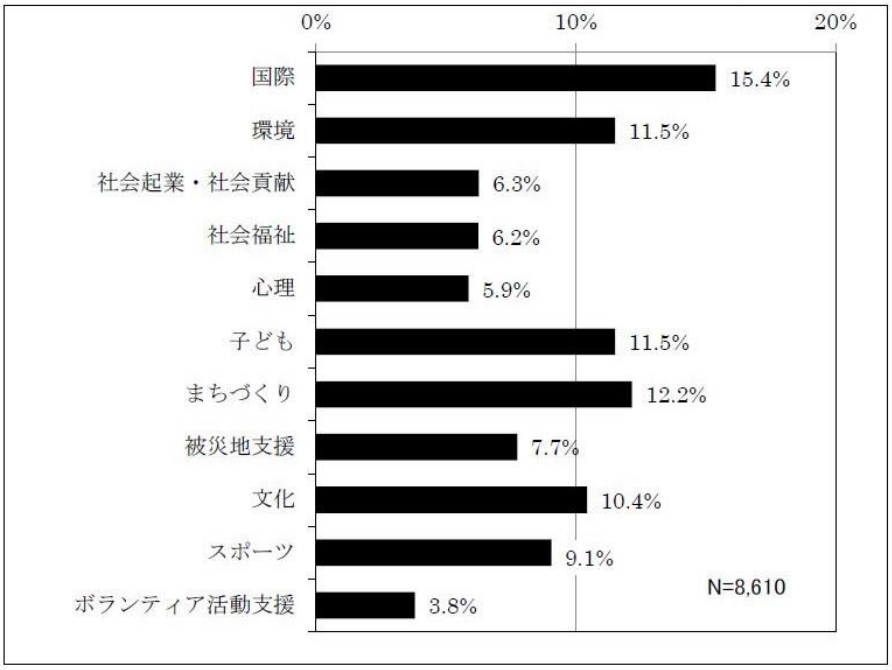
図2　入学前に参加したボランティア活動の分野



注1）入学前にボランティアに参加したことがあると回答した者のみ集計。
注2）延べ回答数が母数（N=1579）。

一方で、新入生が関心をもっているボランティア活動は、図3に示すとおりである。図2と比較して、環境、社会福祉、子どもの数値が図3のほうが著しく低くなっているのに比べ、国際、心理、文化の数値が著しく高くなっている。環境、子ども、まちづくりは人気の分野であるので注力しつづける必要があるものの、大学でのボランティア活動ということで特色を出すのであれば、国際、心理、文化の分野のボランティア活動にフォーカスを当てていくのも一案である。

図3　「どのようなボランティア活動に関心がありますか」の回答



注1）各分野内訳で1つ以上の回答があれば1とした集計。
注2）延べ回答数が母数（N=8610）。

延べ回答数ではなく回答者全体（N=2325）を母数としたデータにおいて、約20%を超える新入生が関心をもっている活動内容は、国際分野では国際協力（27.7%）と異文化交流（38.8%）、環境分野では動物保護（20.7%）、子ども分野では放課後活動（遊び、勉強など）（25.7%）と保育園・赤ちゃんボランティア（23.1%）、まちづくり分野では祭り・イベント（32.1%）、文化では音楽（24.0%）と映画（19.7%）、スポーツでは大会・イベント運営（25.5%）となっている。なお、心理分野ではメンタルフレンド（12.6%）と不登校児童・生徒の支援（15.4%）への関心が高い。

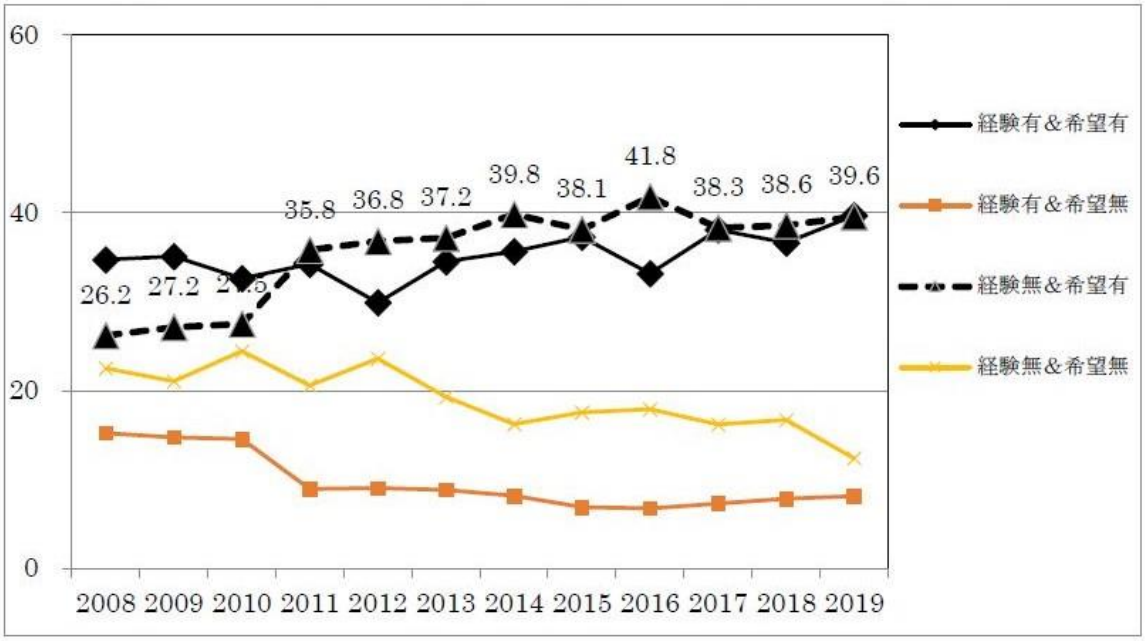
ボランティアセンターが提供している1 Day for Others（1日社会貢献プログラム）は、比較的ハードルの低いボランティア活動で、新入生にとってボランティア活動に対する関心を深める絶好の機会である。その1 Day for Othersで2019年度に実施されたプログラムを独自に分析してみると、実施プログラムにおける延べ関連分野数を母数（N=117）としたとき、国際が15.4%、環境が13.7%、社会起業・社会貢献が9.4%、社会福祉が15.4%、心理が3.4%、子どもが16.2%、まちづくりが15.4%、被災地支援が0.9%、文化が6.0%、スポーツが3.4%、ボランティア活動支援が0.9%の割合で実施されたことがわかった。

大学でのボランティア活動としてフォーカスを当てていきたい分野で言えば、国際ではニーズに見合うプログラム数を提供できているものの、心理と文化では、学生の関心に大幅に応えられていない。そのほか、学生の関心との乖離が大きいものに注目してみると、プログラム数が少ないものとしては被災地支援とスポーツが、多いものとしては子どもと社会福祉があげられる。1 Day for Othersのプログラムの改編を考える際の参考になろう。

3. 1 Day for Othersの意義

入学前のボランティア活動参加経験と大学時代におけるボランティア活動への参加希望とをクロス集計し、4分類（経験有&希望有、経験有&希望無、経験無&希望有、経験無&希望無）し、その経年変化を示したものが図4である。顕著な変化を見せているのが、経験無&希望有で、2008年度には26.2%だったにもかかわらず、2019年度には39.6%まで上昇した。2011年度以降は、経験有&希望有（2019年度は39.7%）を上回ることが多くなっている。つまり明治学院大学でボランティア活動を希望する新入生の半数以上が、入学までにボランティア活動をしたことがないことになる。

図4　ボランティアの参加経験と参加希望による4分類の経年変化（%）



ボランティア活動を経験したことのない新入生にとって、ボランティア活動の第一歩として有力な選択肢は、1 Day for Othersであろう。そこで、1 Day for Othersへの参加希望がどの程度の水準なのかを見てみると、「参加する」「できれば参加してみたい」を合わせると毎年度、約4割程度になっていることがわかる（表2）。各年度ともに最も数値が大きいのが「情報を確認してから参加を考える」である。「参加しない」と回答する新入生は、2013年度の9.5%から2019年度の5.1%へと半減している。上記から、1 Day for Othersにまったく関心のない新入生はほとんどいないことがわかる。重要なのは、「情報を確認してから参加を考える」と回答している層に1 Day for Othersのプログラムをいかに魅力的に見せられるかであろう。

表2　1 Day for Othersへの参加希望の経年変化

	2013		2014		2015		2016		2017		2018		**2019（今年度）**	
	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	**回答者数**	**割合（%）**
参加する	150	5.5	147	4.9	205	7.3	189	6.6	291	10.2	194	7.2	**165**	**7.1**
できれば参加してみたい	868	32.1	821	27.6	855	30.3	950	33.1	1,132	39.7	949	35.0	**817**	**35.1**
情報を確認してから参加を考える	1,257	46.4	1,543	51.9	1,481	52.4	1,468	51.1	1,197	42.0	1,351	49.8	**1,179**	**50.7**
参加しない	257	9.5	244	8.2	235	8.3	207	7.2	167	5.9	166	6.1	**119**	**5.1**
未回答	176	6.5	220	7.4	50	1.8	56	2.0	62	2.2	51	1.9	**45**	**1.9**
全体	2,708	100.0	2,975	100.0	2,826	100.0	2,870	100.0	2,849	100.0	2,711	100.0	**2,325**	**100.0**

2019年度に1 Day for Othersで提供しているボランティア活動に参加した662人に対して実施されたアンケートによると（79人が未回答なので、母数は583）、1 Day for Othersに参加した理由として最も多かったのが、「興味があるプログラムがあったから」（62.3%）で、それに「ボランティアをしてみたかった」（27.1%）が続く。「授業の課題だったから」「就職に役立ちそうと思ったから」「サティフィケイトプログラムに申請したから」はそれぞれ3～4%ほどであり、提供するプログラム（ボランティア活動）の内容が非常に重要であることがわかる。

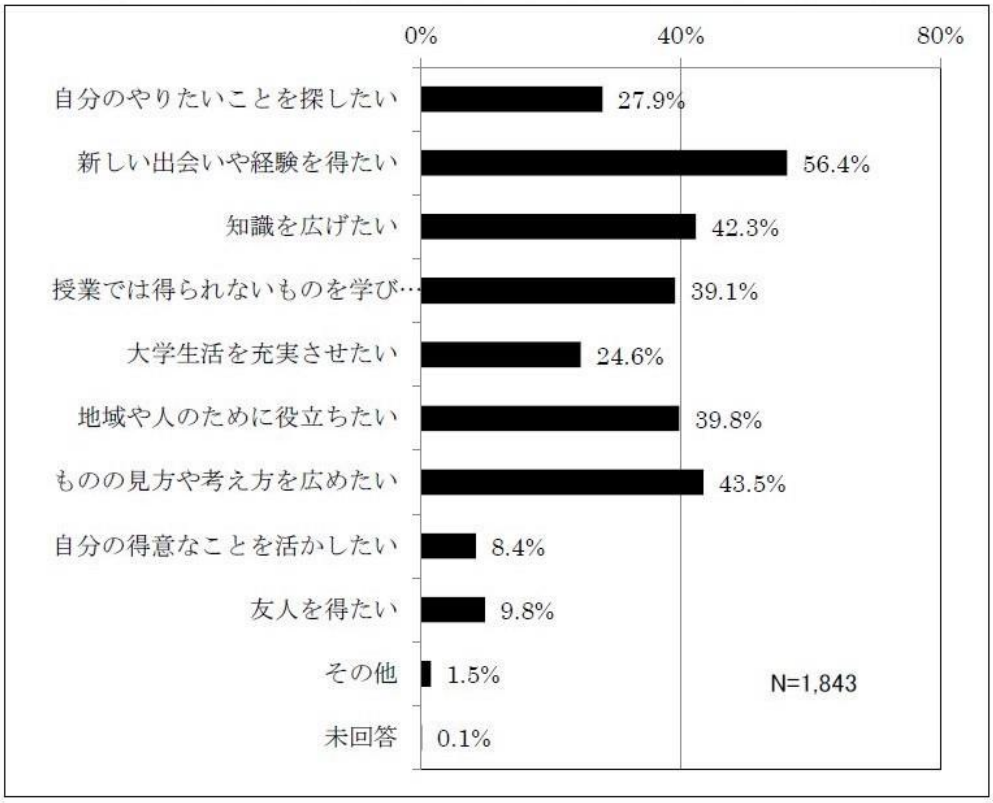
プログラム参加者の53.2%が「大満足」と回答しており、「満足」とあわせると91.7%に達する。アンケートからは、1 Day for Othersで提供されているボランティア活動の質が高いことがうかがえる。「次年度の1 Dayでリーダーをやってみたいですか」という問いに対して107人（18.3%）が「はい」と回答していることや、「1 Day for Othersに参加して何か得るものはありましたか」という問いに対して、「社会にもっと関心をもった」（48.9%）、「社会貢献活動をはじめたいと思った」（24.9%）、「本学での学びをより深める気づきがあった」（14.6%）という回答が多かったことから、1 Day for Othersが大学でのボランティア活動の第一歩としての役割を十分に果たしていることがうかがえる。

入学前にボランティア活動を経験したことのない新入生が増加しているため、1 Day for Othersにかかる期待はますます大きくなっている。プログラムの分野を新入生の関心に沿ったものにしていくとともに、可能な範囲でプログラム数（2019年度は82プログラム）や参加受入人数を増やしていくことが望ましい。プログラム数を増やすにあたっては、教職員やボランティアセンター募集団体の助けを積極的に借りてはどうか。

4. 参加・不参加の理由

「ボランティア活動に参加したい理由を教えてください」という問いに対する回答を示したものが図5である。

図5　「ボランティア活動に参加したい理由を教えてください」の回答



注1）ボランティア活動の参加希望者が母数（N=1843）。

「新しい出会いや経験を得たい」（56.4%）、「ものの見方や考え方を広めたい」（43.5%）、「知識を広げたい」（42.3%）といった「自己実現型」の動機が上位を占め、「地域や人のために役立ちたい」（39.8%）といった「問題解決型」の動機がそれに続くというのは、新入生アンケートを取り始めてからほとんど変わらない傾向である（「新入生のボランティアに対する意識と経験の実態　－2006年度明治学院大学「新入生ボランティア活動アンケート」からー」（以下、『ボランティアセンター報告書　第3号』）p.40参照）。

学びという意味では自己実現型の動機も重要であるが、ボランティアセンターとして社会課題に取り組むことを推奨していこうとするのであれば、「地域や人のために役立ちたい」といった問題解決型の動機が多くなるように、外部や新入生に向けて情報を発信していく必要がある。アンケートの回答項目が自己実現型に偏っていることから、「社会課題に取り組みたい」のような問題解決型の回答項目を来年度から増やしてはどうか。同時に、問題解決型の動機からボランティア活動に参加する学生が増えるような方法を考えていく必要がある。

ボランティア活動に参加したくない理由のトップは、「時間がない」（48.8%）で、それに「関心がない」（27.7%）が続く。「きっかけがない」（21.0%）、「やりたいものがない」（17.4%）、「知識や技術がない」（15.3%）、「情報がない」（9.4%）といった回答に対応することでボランティア活動の参加者が増えるかもしれないが、基本的にはボランティア活動に参加したいと考えている新入生のサポートを優先するほうが有意義だと思われる。

ただ、ボランティア活動への不安に対しては、真摯に向き合う必要がある。ここ最近の新入生アンケートでは質問自体が無くなっているようだが、2006年度のアンケートでは「ボランティア活動を始めようとするときに、主に心配なことは何ですか」という問いが設定されていた。そこでは、「自分にできるか」（43.2%）、「相手とうまく接することができるか」（32.6%）、「役に立てるか」（31.6%）、「最後まで続けられるか」（31.1%）、「何をしたらよいか」（29.8%）、「自分の時間がなくなってしまわないか」（26.4%）、「お金がかからないか」（17.6%）といった多様な不安が、それなりに高い割合で表明されていた（『ボランティアセンター報告書　第3号』pp.44-45）。いまの学生もボランティア活動への不安を少なからず抱えていると思われるので、アンケートなどを通じて不安を把握するとともに、それぞれの不安に対する対処法をまとめた小冊子を作成したり、個別に相談できる体制を整えたりすることが望まれる。新入生アンケートの質問項目としても、参加したくない理由よりもボランティア活動への不安を尋ねたほうが有益だと思われる。

5. 教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム

サティフィケイトプログラムについては、1 Day for Othersプログラムと同様の指摘ができる。すなわち、2019年度新入生アンケートにおいてサティフィケイトプログラムに「参加する」が2.5%、「できれば参加してみたい」が21.9%なのに対し、「内容を確認してから参加を考える」が64.6%と圧倒的多数である。「参加しない」と決めているのはわずか8.6%であることから考えて、内容の充実と適切な情報発信がプログラム参加者の増加につながることが予想される。

6. 結語

新入生のボランティア活動に対する関心は高く、参加したいと回答する新入生の数も年々増加している。それに伴い、ボランティアセンターが果たすべき役割も大きくなっている。

入学前にボランティア活動に参加したことがないものの大学時代にボランティア活動に参加したいという学生が近年増加している。明治学院大学でのボランティア活動の第一歩として位置づいている1 Day for Othersの分野を新入生の関心に合わせて改編するとともに、可能な範囲でプログラム数や参加受入人数を増やしていくことが望ましい。また新入生にとって1 Day for Othersが魅力的に映るような情報発信が必要である。

1 Day for Othersを経験した学生を次のステップにどのように進ませていけるか、社会課題に取り組む学生をどのように育てていけるか、多様な学生の要望に寄り添ったサポートをどのように実現していけるかがボランティアセンターの今後の大きな課題である。

（ボランティアセンター長補佐　林公則）

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

・明治学院大学同窓会
・明治学院大学保証人会
・明治学院大学ハロプロ研究会
・個人２名（氏名非公表）

上記の皆さまよりご支援を頂戴しました。

2019年度　各委員一覧

ボランティアセンター運営委員

野 沢　慎 司　(副学長)【委員長】
Charles Browne　(文学部)
宋　立 水　(経済学部)
澤 野　雅 樹　(社会学部)
西 村　万里子　(法学部)
久保田　浩　(国際学部)
谷 川　夏 実　(心理学部)
長谷部　美 佳　(教養教育センター)
岡　伸 一　(宗教部長)
大 平　浩 二　(教務部長)
亀ヶ谷　純 一　(学生部長)
武 村　美津代　(事務局長)
杉 山　恵理子　(センター長)
猪 瀬　浩 平　(センター長補佐)
林　公 則　(センター長補佐)
菅 沼　彰 宏　(ボランティアコーディネーター)
田 口　めぐみ　(ボランティアコーディネーター)

ボランティア活動推進委員

杉 山　恵理子　(センター長)【委員長】
高 倉　誠 一　(社会学部)
可 部　州 彦　(有識者)
谷 口　浩 一　(学外有識者)
唐 木　富士子　(学外有識者)
原 田　勝 広　(学外有識者)
猪 瀬　浩 平　(センター長補佐)
林　公 則　(センター長補佐)
菅 沼　彰 宏　(ボランティアコーディネーター)

ボランティアセンタースタッフ

杉 山　恵理子　(センター長)
猪 瀬　浩 平　(センター長補佐)
林　公 則　(センター長補佐)
波多野　洋 行　(次長)
菅 沼　彰 宏　(ボランティアコーディネーター)
田 口　めぐみ　(ボランティアコーディネーター)
高 橋　千 尋　(課長)
金 子　美 咲
瀬 下　幸 恵　(19年10月～)
青 木　洋 治
大 野　洋 子
林　志津子　(19年10月～)
町 田　理 美　(～19年7月)
大田垣　美 穂　(～20年1月)

明治学院大学ボランティアセンター規程

2001年 7月18日　大学評議会承認
2004年 5月19日　大学評議会承認
2004年10月20日　大学評議会承認
2005年10月 7日　常務理事会承認
2005年12月 9日　常務理事会承認
2006年 1月13日　常務理事会承認
2006年 7月14日　常務理事会承認
2010年 3月12日　常務理事会承認
2014年 3月14日　常務理事会承認
2018年 5月11日　常務理事会承認

（設置）

第１条　明治学院大学(以下，「本学」という。)に明治学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第２条　センターは，共通教育機関として，「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり，ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

（業務）

第３条　センターは，前条の目的を達成するため，以下の業務を行う。

(1) サービス・ラーニングプログラムの企画，実施
(2) 学生等に対するボランティアの立ち上げなど，学生の自主的活動の支援と助言
(3) 地域や国際社会への貢献を目指し，社会との協働によるボランティアプログラムの開発
(4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
(5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
(6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
(7) その他，学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

（活動）

第４条　センターは，第２条の目的を達成するため，以下の学生の活動を支援する。

(1) キャンパス周辺の地域に貢献する活動
(2) ボランティア入門プログラムに伴う活動
(3) 地震，津波，台風，洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
(4) 海外でのボランティア等に関する活動
(5) 学外の人道支援機関，特定非営利活動法人（ＮＰＯ），企業等との連携活動
(6) ボランティア参加への啓発活動
(7) その他

（運営委員会規程）

第５条　センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため，明治学院大学ボランティアセン

ター運営委員会を置く。

2　センター運営委員会規程は，これを別に定める。

（構成）

第6条　センターには次の職員を置くことができる。

(1) センター長　1名

(2) センター長補佐　若干名

(3) ボランティアコーディネーター　若干名

(4) 非常勤ボランティアコーディネーター　若干名

(5) 事務職員　若干名

（センター長）

第7条　センター長は本学専任教員の中から，学長が任命する。その任期は2年とし，再任を妨げない。

2　センター長は，センターの業務を統括する。

（センター長補佐）

第8条　センター長補佐は，本学専任教員の中から，センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし，再任を妨げない。

2　センター長補佐は，センター長の業務を補佐する。

（ボランティアコーディネーター）

第9条　ボランティアコーディネーターの任用等は，「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2　非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は，「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

（評価・評価委員会）

第10条　ボランティアコーディネーターは，契約更新時にセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は，その結果を学長に報告する。

2　非常勤ボランティアコーディネーターは，契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

3　前2項に基づき設置する評価委員会は，副学長，学生部長，センター長，センター長補佐，大学事務局長，その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

（活動推進委員会）

第11条　センターに，その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2　推進委員会は，センター長の諮問に応じて助言または提案を行い，推進委員によって構成される。

3　前項の推進委員は，ボランティア活動に識見を有する専任教職員，学生等，およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家（若干名）からなり，その任期は2年とし，再任を妨げない。専任教職員にあっては，所属長の推薦により，その他の者にあっては運営委員会の議を経て，センター長が委嘱する。

4　センター長は，必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

（学生メンバー）

第12条　センターの業務の遂行にあたって，センター長は，学生の参加と協力を求めることができる。

（規程の改廃）

第13条　本規程の改廃は，センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付　則

1　この規程は，2001年7月18日から施行する。

2　この規程の施行により，「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。

3　2002年4月1日一部改正施行（第3条第2項，教養教育センター設置による。）

4　2004年4月1日一部改正施行（第3条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）

5　2004年8月1日一部改正施行（第4条ボランティア・コーディネーター，事務職員数の変更による。）

6　2005年11月1日一部改正施行（第7条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。第8条評価・評価委員会，新設）

7　2006年1月1日一部改正施行（コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。）

8　2006年1月1日一部改正施行（第7条2項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。）

9　2006年4月1日一部改正施行（第3条事務局職制変更による）

10　2010年4月1日一部改正施行（基本理念作成委員会の答申に基づき，第2条目的および第3条業務を見直し，第4条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除，第5条センター長補佐の人数を変更，第7条センター長補佐は専任教員の中から選する，第9条2項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記，3項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加，第10条4項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加）。

11　この規程は，2014年4月1日から施行する。（第3条3項，第4条学生の活動内容の追加，第5条3項の削除，第11条2項，第11条3項推進委員の学外有識者・実務家を2名から若干名へ変更，第12条見出し変更）

12　この規程は、2018年5月11日から施行する。（第6条ボランティアコーディネーターの人数変更、第10条評価を受ける周期の変更）